

永遠の真理

ETERNAL TRUTH



2014年 4月

「永遠の命とはキリストとを知ること」「霊的な成長においてキリストを映す」

「第二天使のメッセージ『バベルの塔とその建設者たち』」

永遠の真理

いま永遠の真理の土台の上に堅く立ちなさい。(3T p.45)

目次

今月の聖書勉強

「永遠の命とはキリストを知ること」 4

朝のマナ

「霊的な成長においてキリストを映す」 9
キリストを映して

現代の真理

「バベルの塔とその建設者たち」 70
三重のメッセージ・第二天使のメッセージ・

力を得るための食事

「にらと油揚げの餃子」 80

お話コーナー

「スカンジナビアの子供説教者たち」 82

教会

【正丸教会】

〒368-0071 埼玉県秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1
電話：0494-22-0465
FAX：0494-40-1045

【高知集会所】

〒780-8015 高知県高知市百石町 1-17-2
電話：088-831-9535

【沖縄集会所】

〒905-2261 沖縄県名護市天仁屋 600-21
電話：0980-55-8136

アクセス

ホームページ：<http://www.4angels.jp>
メール：support@4angels.jp

発行日 2014年3月31日
編集&発行 SDA 改革運動日本ミッション
〒368-0071 秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

Illustrations: Dreamtimes on front cover; Getty Images
on page 7

聖書

聖書は、時代が異なり、身分や職業、また知的靈的な才能も広く異なっている人々によって書かれたので、その中の諸書は、そこに示されている主題の性質が異なっていると同時に、その文体にもいちじるしい対照がみられる。……幾人かの記者が、異なった角度と関連から一つの主題を示しているので、浅薄に、不注意に、あるいは偏見をもって、これを読む者には、相違や矛盾があるように思われるかも知れないが、思慮深い、敬虔な者が、はっきりした眼でこれを読めば、その根底には調和があることに気づくのである。

真理は、いろいろな人によってあらわされているので、いろいろな角度から示されている。……おのおのは、聖霊のみちびきのもとに、自分の心に最も力強く訴えるものを示しているのである。……しかしそこには、全体を通じて完全な調和がみられるのである。このようにしてあらわされた真理は、結合して完全な全体を構成し、人生のあらゆる境遇と経験の中にある人々の要求にこたえるのに適したものとなっているのである。

神は、ご自分の真理を、人間を通して世にお伝えになった。……宝は土の器である人間に託されたが、しかしその宝が天来のものであることにはかわりがない。あかしは、人間のことばという不完全な表現を通して伝えられたが、しかしそれは神のあかしである。神を信ずる従順な子らは、その中に、恵みと誠とに満ちた、神の力の栄光を見るのである。

神は、みことばを通して、救いに必要な知識を人間にお与えになった。われわれは、聖書を、神のみこころについての権威ある、まちがいのない啓示として受けとらねばならない。聖書は品性の規準であり、教理を示すものであり、経験を吟味するものである。「聖書は、すべて神の靈感を受けて書かれたものであって、人を教え、戒め、正しくし、義に導くのには有益である。それによって、神の人が、あらゆる良いわざに対して十分な準備ができて、完全にとのえられた者になるのである」(テモテ第二 3:16,17)。……

聖書に靈感を与えたのは聖霊だったのであるから、聖霊の教えがみことばの教えと相反するということはありません。 (各時代の争闘上巻序文II～IV)

「永遠の命とはキリストを知ること」

「永遠の命とは、唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがつかわされたイエス・キリストとを知ることです。」(ヨハネ 17:3)

この聖句はわたしたちが何度も読み、また考えたことのある聖句ですが、この「永遠の命」とはいったい何か、それはその言葉通り「知ること」と書いてあります。

最初に英語を学んだとき、その教科書にどのようなことが書いてあったかを覚えていませんか。“This is a pen”これが母国語ではない外国語を学ぶ基本的で初歩的の教えます。This is とは、これは～ですという意味です。このヨハネ 17 章 3 節をイエス様がこのように教えて下さいます。英語では “This is life Eternal (これが永遠の命である)” です。

永遠の命とは唯一の真の神とイエス・キリストを知ることだとありますが、それは単純にその字義通りに理解されるべき基本的教えます。これは神様から罪によって離れてしまった人間がイエス様に従い永遠の命を受けるために学ぶべき基本の基本なのです。「神を見た者はいない」とありますがイエス様は人となってわたしたちに見えるかたちで来て下さったので、この方を知ることが可能であり、それ自体が永遠の命です。

永遠の命とは知ることです、と言われるとき、それはどのような意味ですか。命というとそれをつなぐ食物や血液を一般的に考えます。しかし、永遠の命を、証の書は「神の命と比較する命」と表現しています。神様の命とはいにしえから永遠の未来までとしか、わたしたちには表現できません。つまり神様には「から」と「まで」はありません。その方は永遠のお方です。

弟子たちに、五千人のひとたちにあなたたちの手で食物をあげなさいとイエス様が言われたとき、彼らは神様に何がおできになるかを考えず、すぐに自分たちの範囲でできることを考えました。しかし頭の思考回路というものは雨が降る時にその水が流れるように地面に細く道筋をつくとそこを流れていきましたが、月日が経つにつれその細い道筋がだんだんと深く広くなっていくように

わたしたちの考えも同様にずっと考え続けて行くうちにそれはもつと深くさらに広くなるのが分かります。イエス様の教えは色々な事ではなく同じ事を繰り返しておっしゃいます。なぜ同じ事を繰り返されるかは、それを彼らが理解せず知らずにいたからでした。

奇跡を見聞きしていながら...

「答えて言われた、「行って、あなたがたが見聞きしたことを、ヨハネに報告しなさい。盲人は見え、足なえは歩き、らい病人はきよまり、耳しいは聞え、死人は生きかえり、貧しい人々は福音を聞かされている。」(ルカ 7:22)

このイエス様の奇跡をまちかに見聞きした弟子たちが、イエス様が十字架にかかって亡くなられたときにイエス様に対する信仰を持っていませんでした。

死人が生き返ったのを見たら自分なら信じると断言する人も、弟子たちのようにイエス様がよみがえられたのを見ても幽霊だと言ったように、いざとなったら信じることができません。

これはとても深刻な問題です。弟子たちはイエス様が五千人を養われたとき、実際そのパンを人々に配った人たちでした。しかし、その奇跡を目の当たりにした彼らは、イエス様が亡くなられたとき信仰がありませんでした。死人がよみがえるのを見、聞こえない人が聞こえるようになったのを見たから、それがその人の信仰を強めるものにはならないことが分かります。

「あなたがたは知って、わたしを信じ」

「主は言われる、「あなたがたはわが証人、わたしが選んだわがしもべである。それゆえ、あなたがたは知って、わたしを信じ、わたしが主であることを悟ることができる。わたしより前に造られた神はなく、わたしより後にもない」(イザヤ 43:10)。わたしたちが知って信じるときにこの方がわたしの主であることを悟るようになります。

「そこでイエスが言われた、「ああ、愚かで心の鈍いため、預言者たちが説いたすべてのことを信じられない者たちよ」(ルカ 24:25)。未信者でもなく信仰を持つのが当たり前のはずのこの弟子たちがイエス様に対する信仰を持っていなかったのはどうしてでしょうか。

五千人をパンで養われた奇跡を見た後、群衆を解散させたイエス様に対して弟子たちの頭の中はその素晴らしい奇跡を思い起こすことより、なぜその機会にイエス様が王であると宣言しないで群衆を解散させてしまったのかということでした。そのとき、彼らの思いがイエス様のことで満たされていたなら、イエス様が十字架にかかられたとき、このお方がメシヤであることを信じることはできたは

ずです。

その状態で三年半が過ぎ、四千年前のアダムの時代から預言されていたできごと（イエス様の十字架）が起きたときにそれを信じることはできませんでした。

聖書を解き明かされた

『キリストは必ず、これらの苦難を受けて、その栄光に入るはずではなかったのか』こう言って、モーセやすべての預言者からはじめて、聖書全体にわたり、ご自身についてしるしてある事どもを、説きあかされた。」（ルカ 24:26, 27）

「彼らは互に言った、『道々お話しになったとき、また聖書を説き明して下さったとき、お互いの心が内に燃えたではないか。』（ルカ 24:32）

「それから彼らに対して言われた、『わたしが以前あなたがたと一緒にいた時分に話して聞かせた言葉は、こうであった。すなわち、モーセの律法と預言書と詩篇とに、わたしについて書いてあることは、必ずことごとく成就する。』（ルカ 24:44）

「そこでイエスは、聖書を悟らせるために彼らの心を開いて言われた、『こう、しるしてある。キリストは苦しみを受けて、三日目に死人の中からよみがえる。』（ルカ 24:45, 46）

ここに解決方法が述べられています。いろいろな奇跡を見、経験したにもかかわらず信じることのできない人たちがイエス様からの聖書研究を受けて信じる者になりました。これが、信じることのできない人たちを信じるようにさせるイエス様の方法、つまり未信者を信者にする方法です。

「キリストは、聖書の歴史のアルファであるモーセの書から始めて、聖書全体を通じて、ご自身に関する事柄を解説された。もしキリストが最初にご自分を彼らにお知らせになったら、彼らの心は満足してしまったであろう。喜びのあまり、彼らはもう何も求めなかったであろう。」（各時代の希望下 333）

「彼らは、旧約の型と預言を通して、キリストについてたてられている証を理解する必要があった。これらのものの上に彼らの信仰が築かれねばならない。」（同上）

「キリストは、彼らを悟らせるのに奇跡を行なわれず、聖書を説明することがその最初の働きであった。」（同上）

御言葉

「世の人々に命を与えるキリストの命は、そのみ言葉のうちにある。イエスが病気をいやし、悪鬼を追い出されたのはそのみ言葉によってであった。そのみ言葉

によって、主は海を静め、死人をよみがえらせられた。人々は彼のみ言葉に力があつたことを証した。キリストは、旧約のすべての預言者たちと教師たちとを通して語られたように、神のみ言葉をお語りになった。」(各時代の希望中 139, 140)

弟子たちはイエス様の病気を癒した御言葉の力ではなく、御言葉によって起きたできごとに注意を向けていました。わたしたちはどうでしょうか。病人を癒されたことだけをずっと素晴らしい素晴らしいと語っていてもそれが信仰の基礎とはならないのです。

「聖書全体はキリストを表わすものであつて、救い主は、ご自分に従う者の信仰をみ言葉の上に固くすえようと望まれた。キリストの目に見える存在がとり去られたとき、み言葉が彼らの力の源でなければならない。」(各時代の希望中 140)

イエス様の聖書研究の方法

「それから彼らに対して言われた「わたしが以前あなたがたと一緒にいた時分に話して聞かせた言葉はこうであつた。即ち、モーセの律法と預言書と詩篇とに、わたしについて書いてあることは、必ずことごとく成就する」(ルカ 24:44)。

「預言から論じて、キリストは弟子たちにご自分が人としてどういうお方であるべきかについて正しい概念をお与えになった。人々の希望通りに王位と王権をとられるメシヤを、彼らが期待していたことから誤解が生じていた。」(各時代の希望下 334)

「それは、最高の地位から最低の地位までキリストがおくだりになった事についての正しい見解と矛盾するのであつた。キリストは、弟子たちの考え方がこまかい点にいたるまで純粹であり、また真実であるように望まれた。」(同上)

聖書をつぶさに調べた

イエス様と聖書勉強ができたペテロはこのイエス様の聖書勉強の方法を学びました。

「あなたがたは、イエス・キリストを見たことはないが、彼を愛している。現在、見てはいけなけれども、信じて、言葉につくせない、輝きにみちた喜びにあふれている。それは、信仰の結果なる魂の救を得ているからである。この救については、あなたがたに対する恵みの事を預言した預言者たちも、たずね求め、かつ、つぶさに調べた。彼らは、自分たちのうちにいますキリストの霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光とを、あらかじめあかした時、それは、いつの時、どんな場合をさしたのかを、調べたのである。そして、それらについて調べたのは、自分たちのためではなくて、あなたがたのための奉仕であることを示された」(ペテロ I 1:8 ~ 12)

「あなたがたは主の書をつまびらかにたずねて、これを読め。これらのもの

は一つも欠けることなく、また一つもその連れ合いを欠くものはない。」(イザヤ 34:16)

「キリストは、聖書の歴史のアルファであるモーセの書から始めて、聖書全体を通じて、ご自身に関する事柄を解説された。」(各時代の希望下 333)

「キリストは、その教えの中で、ご自分が初めにお教えになった古い真理や家長と預言者を通じてご自分がお語りになった真理をお教えになった。ところが今度は、その真理に新しい見方をお与えになった。すると、その意味がなんと異なってみえたことであろう。イエスが説明なざると、光と霊性がみなぎるのであった。そして、主の御約束によって、弟子たちには、聖霊が与えられ、悟りが開かれて、神のことが常に彼らの前に明らかにされるのであった。彼らは、新しい美に包まれた真理を、人びとに伝えることができた。」(キリストの実物教訓 105)

キリストを映して

Reflecting CHRIST



4月 「霊的な成長においてキリストを映す」

4月1日

交わりについての神の本来のご計画

「彼らは、日の涼しい風の吹くころ、園の中に主なる神の歩まれる音を聞いた。」
(創世記 3:8)

すべての真の知識と真の発達の源は、神を知ることの中にある。物質界でも精神界でも霊界でも、罪の弊害を除けば、そこに見られるすべてのものに、この知識が表わされている。どういう方面の研究に従事しようと、真理に到達しようとの純粋な目的をもっているかぎり、われわれは、万物の中に働き、また万物を通して働いておられる目に見えない大能の神に触れるようになるのである。人間の思いは神のみこころに交わり、有限な人間が無限の神と交わるようになるのである。こうした交わりが、人の知、徳、体におよぼす影響には測り知れない価値がある。

この交わりの中に最高の教育が見いだされる。それは神ご自身の方法による教育である。神は、「あなたは神と和らいで、(原文・神を知れ)」と人類に仰せになっている。この言葉の中に表わされている方法が、人類の父祖アダムの教育のために用いられた方法であった。アダムが罪を知らない人間として、栄光につつまれて、神聖なエデンに住んでいたとき、神は、彼をこのように教育されたのである。……

アダムが創造主のみ手によってつくられたとき、彼の肉体と知能と霊性は、神のみかたちをそなえていた。「神は自分のかたちに人を創造された」としるされている。神の御目的は、人が長く生きれば生きるほど、ますます、はつきりと神のみかたちをあらわすこと、すなわちなおいつそう明らかに創造主の栄光を反映することであった。人間のあらゆる才能は発達することが可能であって、それらの才能の能力と活力はたえず増大することになっていた。そうした才能を働かせるために、広い機会が与えられ、研究のために輝かしい分野が開か

れていた。……創造主と顔をあわせて、心と心の交わりをすることが、アダムのとつといの特権であった。もし彼が、神への忠誠心を変えなかったなら、この特権は、永久に彼のものとなったであろう。……アダムが、創造された目的を十分に果たせば果たすほど、創造主の栄光は、ますますはっきり反映されたであろう。(教育 3, 4)

自然界の法則と営み、また霊界を支配する真理の大原則は、万物の創造主であり限りない存在であられる神によって彼らの心に示された。彼らの知的また霊的な能力は、「神の栄光の知識」の中にあつて発達し(コリント第二 4:6)、彼らは自分たちの聖なる存在の最高の歡喜をおぼえた。……

エデンの園は全地をこのようにしたいという神のご希望のあらわれであつた。人類家族の数がふえるにしたがつて、エデンの園で神から与えられたのとおなじような他の家庭や学校を設けるようにというのが神のみこころであつた。こうして全地は、時がたつにつれて、神のみ言葉とみわざを学ぶ家庭や学校で満たされ、生徒たちは永遠にわたつて神の栄光を知る光をますます深く反映するのにふさわしい者となるはずであつた。(同上 12)

4月2日

キリストは宇宙の富を提供なさる

『やみの中から光が照りいでよ』と仰せになった神は、キリストの顔に輝く神の栄光の知識を明らかにするために、わたしたちの心を照して下さったのである。」(コリント第二 4:6)

人類は罪を犯したために、神から追放されてしまった。救済の計画がなかったなら、神よりの永遠の別離と、常夜のはてしないやみが、人類の運命となったであろう。しかし、救い主の犠牲によって、再び神と交わることができるようになった。われわれは、自分だけでは、神のみ前に近づくことも、神のみ顔を仰ぎ見ることもできない。ただ救い主イエス・キリストの中にあつて、神を仰ぎ見ることも、また神と交わることもできるのである。「神の栄光の知識」は「イエス・キリストの顔」に表わされている。「神はキリストによって、わたしたちをご自分に和解させ」られたのである(コリント第二 4:6, 5:19)。……

「この言(彼のうち)に命があつた。そしてこの命は人の光であつた」(ヨハネ 1:4)。われわれの救済のために払われた代価であるキリストの生命と死は、わたしたちにとって生命の約束と保証、また知識の宝庫を再び開くかぎであるばかりでなく、それはエデンの聖者たちが知っていたよりも、もっと広くてもっと高い神のご品性の現われである。

キリストは天を人に開かれるが、一方また人の心は、キリストのおあたえになる生命によって、天にむかつて開かれる。罪は人を神から離れさせるばかりでなく、人の魂から神を知ろうとする願いと能力とを滅ぼしてしまう。こうした罪の働きをすべて取り消すのがキリストの働きである。キリストは、罪によってまひした魂の能力や暗くなった心やゆがめられた意志を活気づけ回復する力を持っておられる。キリストは宇宙の宝庫をわれわれに開いてくださる。これらの宝をみとめ、活用する能力が、キリストから授けられるのである。

キリストは、「すべての人を照らすまことの光」である(ヨハネ 1:9)。人はみなキリストを通して生命を持っているが、同じようにどんな魂もキリストを通して幾らかの天の光が与えられる。どんな人の心にも、知的な能力ばかりでなく、また霊的な能力、すなわち正しいことをみわける能力、良いことをしようとする欲求がある。しかし、こうした原則に対して、一つの相反する能力が戦っている。善悪を知る木の実を食べた結果は、すべての人間の経験にあらわれている。人の性質には、悪への傾向、すなわち自力だけでは抵抗し得ない一つの力が働いている。この力に抵抗し、魂の奥底に唯一の価値を感じている理想を達成するためには、ただ一つの力に助けを求めてすぎるよりほかに道はない。その力とはキリストである。この力と協力することが、人にとって最大の必要である。(教育 20, 21)

キリストは天父の代表者すなわち神と人をつなぐ輪の役目を果たしておられる。キリストは人類の大教師である。彼はさらに男女をご自身の代表者として任命された。(同上 26)

4月3日

自己が隠され、キリストが現われる

「わたしはキリストと共に十字架につけられた。生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。しかし、わたしがいま肉にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神の御子を信じる信仰によって、生きているのである。」(ガラテヤ 2:19, 20)

クリスチャンがバプテスマの厳粛な儀式に服するとき、宇宙の最高権威のお三方―御父、御子、聖霊―は彼の行為を是認され、彼が神を尊ぶために奮闘するとき、彼のためにご自分たちの力を働かせると誓われるのである。彼はキリストの死のさまで葬られ、このお方のよみがえりのさまで引き上げられる。……

天の大いなる権力者のお三方はクリスチャンが要求する助けをすべて与えたと自ら誓っておられる。御霊は石の心を肉の心にお変えになる。そして、クリスチャンは神のみ言葉にあずかることによって、神のみかたちに従った経験を得る。キリストが信仰によって心のうちに宿ってくださるとき、クリスチャンは神の宮である。キリストは罪人の心のうちには宿らず、天の感化力に感じやすい者の心に宿られる。

真のクリスチャンの生活から輝き出る光は、彼がキリストと結合していることを証する。自己は視界から消え、キリストが現われる。……「愛する者たちよ。わたしたちは今や神の子である。しかし、わたしたちがどうなるのか、まだ明らかではない。彼が現れる時、わたしたちは、自分たちが彼に似るものとなることを知っている。そのまことの御姿を見るからである」(ヨハネ第一 3:2)。そのとき命がキリストと共に隠されている者、この地上で信仰の良き闘いを戦った者は神の王国で贖い主の栄光と共に輝き出る。

わたしの兄弟姉妹方よ、あなたがたへの神のご目的は、あなたがたが他の人々をより良くする生活、すなわち栄光の希望であるキリストがうちに形づくられていることを示す生活を送ることである。あなたがたが使徒パウロと共に「生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである」と言うことができることがこのお方の目的である（ガラテヤ 2:20）。完全に満ち足りて、キリストの愛のうちに安んじ、贖い主であり、命の与え主であられるお方があなたのために、あなたの魂の救いを成し遂げてくださると信頼するとき、あなたは、このお方にますます近づいていくにつれ、見えないかたを見ているようにして、忍びとおすということが何を意味するかを知るようになる。……キリストがお与えになる満足は金銀宝石よりも無限に価値のある賜物である。……

わたしたちが神のご支配の下にいる時のみ、わたしたちの生活は純潔であり、わたしたちがこのお方と交わりを保っている時のみ、わたしたちは幸福である。もっとも豊かな経験を得た人々が持っている輝きは、義の太陽の光の反映にすぎない。イエスにもっとも近く生きる者はもっとも明るく輝く。（サイン・オブ・タイムズ 1905 年 8 月 16 日）

4月4日

神への真の明け渡しに伴うもの

「永遠の命とは、唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがつかわされたイエス・キリストとを知ることであります。」(ヨハネ 17:3)

自分自身で必要な過程を進むことなく、何か不思議な変化があなたに起こるのを待つてはならない。人生は、恐れおののいてあなた自身の救いの達成にへりくだって努めるのでなければならない。なぜなら、あなたのうちに働いてその願いをおこさせ、かつ実現に至らせるのは神であって、それは神のよしとされる場所だからである。立ち止まらないであなたの命のために逃げなさい。……

キリストはわたしたちが共に押し進み、ご自分が御父と一つであられたように、わたしたちがご自分と一つであることを求められる。あなたは神に頼り、より気高い生活のために律せられ、訓練されなければならない。しかり、神に頼りなさい。このお方のみ旨を待ち、このお方に従い、従順のうちにそのみ言葉の力により頼みなさい。

最も困難に思えるときに従うことこそ、神への真の明け渡しである。これはあなたの道徳上の性質をよみがえらせ、あなたの誇りを制する。あなたの意志を神の意志に従わせることを学びなさい。そうすればあなたは光のうちにある聖徒の嗣業に見合うものとされる。(原稿 12, 1888 年)

一般的な信仰では十分でない。わたしたちはキリストの義の衣を身につけ、それを公に、勇敢に、断固として、キリストを表わしつつ、まとわなければならない。そして有限な人間に多くのことを期待せず、イエスを見続け、このお方のご品性の完全さに魅了されるようにならなければならない。そのとき、わたしたちは個人個人、イエスのご品性を表すようになり、わたしたちが真理によって鼓舞されていることが明らかになる。なぜなら真理は魂を聖化し、すべ

での思いを虜にしてキリストに従わせるからである。(手紙 14, 1891 年)

どの伝道者にも自己と戦う激しい闘いがあり、これらの闘争が減ることはない。しかしもしわたしたちが絶えずクリスチャン経験に成長しているなら、もしわたしたちが信仰を持ってイエスを見続けるなら、どの緊急の場合にも力が与えられる。再生された性質のあらゆる力と機能は、継続的に日々働かさなければならぬ。わたしたちは日々自己を十字架につけ、誤った方向に意志を引き寄せる傾向やよこしまな気質に対して戦う機会がある。キリストがわたしたちのために得てくださった勝利に、わたしたちが信仰によって入るのでないかぎり、勝利の休息と偉業はまだわたしたちのものではない。(同上 4, 1892 年)

本物の信仰のうちに受け入れられた神のみ約束には、生活と品性に及ぼすかぐわしい感化力があり、人を神のかたちを映すものとする。……神は、ご自身の分の働きをなし、……自分自身の品性において世に本物の聖化を表わすことによって、自分に与えられた恵みを自分の生活の中で分け与える者に恵みを分け与えて下さる。(原稿 45, 1900 年)

4月5日

キリストの愛は満ちたらせる泉

「イエスは女に答えて言われた、……しかし、わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう。」(ヨハネ 4:13, 14)

キリストはヤコブの井戸でサマリヤの女に何と言われたであろうか。……「この水を飲む者はだれでも、またかわくであろう。しかし、わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう」(ヨハネ 4:13, 14)。

キリストが言及なさった水は、ご自分のみ言葉のうちにあるこのお方の恵みの啓示であった。このお方の霊、その教え、その愛はどの魂にとっても満ちたらせる泉のようなものである。人々が頼みとするその他の源はみな満足を与えないことがわかる。しかし真理のみ言葉はレバノンの水で表わされた冷たい流れであり、いつも満ちたらせるものである。キリストの内にはとこしえに続く喜びが満ちみちている。世の快樂や娯樂は決して満足を与えることがないし、魂を癒すこともない。しかしイエスは「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者には、永遠の命があ」と言われた。

キリストのみ言葉のうちにあるこのお方の恵み深いご臨在は魂に語り、このお方を渴く者を活気づける生ける水の井戸として表わす。生きて宿られる救い主を持つことはわたしたちの特権である。このお方はわたしたちのうちにある霊的力の源であって、その感化力は言葉や行動のうちにあふれ、わたしたちの感化力の領域内にいるすべての人を清新にし、彼らのうちに力強さと純潔、聖潔と平和、またなんの悲しみも加えない喜びを求める願望とあこがれとを生じさせる。このような経験こそ、キリストを内住して下さる救い主として持つ結

果である。

〔イエス〕はかつてこの地上で生まれ、ご自分の神性は人性で覆われ、苦しみ誘惑された人として、サタン戦略にとりかこまれていた。……今このお方は神の右におられ、天においてこのお方はわたしたちの助け主として、わたしたちのために執り成しをしておられる。わたしたちは常にこのことを考えて慰めと希望を得なければならない。このお方はこの世で誘惑の的となっている者のことを思いみておられる。主はわたしたちのことを個々に思いみてくださり、わたしたちの一つ一つの必要をご存知である。誘惑されたとき、次のように言いなさい。このお方はわたしを心にかけておられ、わたしのために執り成しをしておられる。わたしを愛し、わたしのために死んでくださった。わたしはこのお方に自らをあますことなくお捧げする、と。

わたしたちはあたかも自分自身が自分の救い主であるかのように自らを嘆くとき、キリストのみ心を深く悲しませる。そうではない。わたしたちは、自分の魂の守りを忠実な創造主である神に委ねなければならない。このお方は、試みを受け、誘惑される者のためにいつも生きて執り成しをしておられる。あなたの心を義の太陽の輝く光線に向かって開きなさい。そして、一瞬の疑いも、一言の不信仰も、あなたの唇から漏れることがあってはならない。あなたが疑いの種をまくことのないためである。わたしたちのために豊かな祝福がある。信仰によってそれらをつかもう。わたしは主にあつて勇気を持つようにとあなたに懇願する。神の力強さはわたしたちのものである。だから、勇気と力強さと信仰を語ろう。(サイン・オブ・タイムズ 1896年9月3日)

4月6日

わたしたちは義の実を結ぶことができる

「こうして、彼らは義のかしの木となえられ、主がその栄光をあらわすために植えられた者となえられる。」(イザヤ 61:3)

クリスチャンはキリストのようであなければならない。彼らはこのお方が持つておられるのと同じ精神、同じ感化力、同じ道徳上の卓越さを持たなければならない。偶像礼拝者で心の墮落した者は、悔い改めて神に向きなおらなければならない。高慢で自己を義とする者は自己を卑しめ、深く罪を悔い、柔和で心のへりくだった者とならなければならない。世的な思いを持っている者は、自分たちがしがみついている世のがらくたから心の巻きひげを取り除き、神にしっかりと巻きつかなければならない。彼らは霊的な思いを持つ者とならなければならない。不正直で誠実でない者は正しく真実な者とならなければならない。野心的で貪欲な者はキリストのうちに隠され、自分自身のものではなくこのお方の栄光を求めなければならない。彼らは自分自身の聖潔を嫌悪し、自分の宝を天に蓄えなければならない。祈らない者は密室の祈りと家族の祈りの両方の必要性を感じ、非常な熱心さをもって神へ嘆願しなければならない。

真の生ける神の礼拝者として、わたしたちは享受している光と特権に相応する実を結ぶべきである。多くの者は天と地の主の代わりに偶像に礼拝している。主を愛しこのお方に全的に信頼する代わりに、人が愛し信頼するものは何であっても偶像となり、天の書にそのように記録される。祝福さえもしばしばのろいに変わる。

働かせることによって強められる人の心の同情は、ときにそれらが畏となるまでゆがめられる。人が譴責される時、いつでも彼に同情する者がいる。彼らは、生活と品性が型であるお方の生活と品性にどの点においても似ていな

い者の悪い感化力によって神のみ事業に及ぼされた害悪をまったく見過ごしている。神はキリストに従っていると公言している民に、メッセージをたずさえたご自分の僕をお送りになる。しかし、ある者が神の子であるのは名前だけであり、彼らはその警告を拒む。

神はすばらしい方法で、人に理性の力をお与えになった。木々がよい実をたわわに結ぶことをよしとされたお方は、人を義という尊い実を結ぶことができるようにしてくださった。このお方は人をご自分の園に植え、優しく彼を世話し、彼が実を結ぶのを期待なさった。いちじくの木の際の中でキリストは「わたしは三年間も実を求めて、このいちじくの木のところきた」と言われる。

.....

わたしたちは気に入った木や植物がつぼみや花や実を結び、自分たちの世話が報いられることを期待して、どれほど切望する思いで見守っていることであろう。そして、それに葉しかないことがわかったら、どれほどがっかりすることであろう。どれほどはるかにまさる切望とやさしい関心をもって、天父はご自身のかたちにかたどって造った者たちと、また高められ、気高くされ、栄光を受けることができるために、その御子を与えるまでにご自分を低くされた者たちの霊的な成長を見守っておられることであろう。(教会への証 5 巻 249 ~ 251)

4月7日

神のみ言葉は強く、力がある

「というのは、神の言は生きていて、力があり、もろ刃のつるぎよりも鋭く」（ヘブル 4:12）

神のみ言葉は霊的命の食物である。「わたしは命のパンである」とキリストは仰せになった（ヨハネ 6:48）……。世界は純潔で混じりけのない真理が欠乏しているために減びつつある。キリストは真理である。このお方のみ言葉は真理である。そしてそれらには、表面に現われているよりもっと深い意味があり、その気取らない外観を超えた価値がある。聖霊によって活気づけられた思いは、これらのみ言葉の価値を識別する。わたしたちの目に聖なる目薬を塗っていただくとき、たとえ表面の下に埋もれていても、尊い真理の宝石を探知できるようになる。

真理は繊細で、精練されており、高められている。それが品性を形づくる時、魂はその神聖な感化力の下で成長する。真理は日々心の中に受け入れられるべきである。こうしてわたしたちはキリストが霊であり命であると宣言されたキリストのみ言葉を食するのである。真理を受け入れると、それは受け入れた者をだれでも神の子、すなわち天の相続人とする。心のうちで大切にされる真理は、冷たく死んだ文字ではなく、生きた力である。

真理は聖なるものであり、神聖なものである。それはキリストのかたちに従って品性を形成するにあたって、他の何よりも強く、力がある。その内には喜びが満ちみちている。それが心のうちで大切にされる時、キリストの愛をどの人間の愛よりも好むようになる。これがキリスト教である。これが魂のうちにある神の愛である。このように純粋で混ぜもののない真理が人の要塞を占めるようになる。「わたしは新しい心をあなたがたに与え、新しい霊をあなたがたの内に授け」とのみ言葉が成就する。活力を与える真理の感化力の下に

生き、働く者の生涯には気高さがある。……

改心していると思われている多くの人々は、試練や誘惑のストレスに耐えようとしな。……彼らには靈的經驗の深みがない。彼らは真理を心と良心に適用しない。……純粹を基調とした敬虔に欠けている。そしてこの欠如のゆえに、彼らは主の軍隊における弱みとなっているが、もし彼らが真に改心することを望みさえしたならば、彼らは巨人になれたはずであった。……

わたしたちは危険な時代に生きている。神を畏れて、わたしたちの品性の正しい道徳的發達のためには、聖書の真の解説が必要であることを、わたしはあなたに告げる。思いと心が聖靈に支配されるとき、自己が死ぬとき、真理は絶えず広がり發達することが可能である。イエスの内にあるがままの真理がわたしたちの品性を形づくるとき、それが事実真理であることが見られるようになる。信者が真理を瞑想するとき、それはその本来の麗しさをもつてますます明るく、ますます輝くようになる。その価値は増し加わり、思いをよみがえらせ、活力を与える。……それはわたしたちの願望を高め、聖潔の完全な標準に到達できるようにする。(ビュー・アット・ヘラルド 1899年2月14日)

4月8日

真理が心に印されねばならない

「神の言葉はみな真実（純粹）である、神は彼に寄り頼む者の盾である。」（箴言 30:5）

神は一人びとりにその人の働きをお与えになり、お授けになった任務と共にご自分の使者にその信仰に比例した力をお与えになる。このお方は絶えず心にご自分の恵の富を明らかにしておられる。神のみ言葉から光を受ける者から光がはっきりとした光線のうちに輝き出る。……

真理を論拠によってばかりでなく、自分たちの生活の中で支持する者は、自分を義の側に置くのである。彼らは改心した生活によって、自分たちが命から命に、もしくは死から死に至る香りである厳粛な警告のメッセージを担っているという証拠を与える。人々が本当に改心するとき、争闘と論争は止む。率直な心を探る真理が、神の祭壇からの燃える炭に触れられた唇から宣布される。……

旧約聖書は実際的な信心の種が最初に蒔かれた地である。これは弟子たちへのキリストのみ言葉の中で繰り返された。わたしたちはなお、ユダヤ制度の全体がぎっしり詰め込まれた福音の預言であることを学ばなければならぬ。それは象徴のうちに表わされた福音である。キリストは雲の柱から、神と同胞に対する人の義務をお示しになった。このお方の定められた代理者に対するこのお方のみ言葉は、旧約でも新約でもはっきりとクリスチャンの徳を指し示している。このお方はあらゆるご自分の教えを通して、真理の尊い種を蒔かれた。すべての者は、もし彼らが敷かれた原則を実践するなら、これらが尊い真珠であり、価値に富むものであることを見出すのである。

わたしたちには真理がある。わたしたちはそれを実践しないのであろうか。利己心はキリストの十字架の宣布を効果のないものにする大きな悪である。

……真理を実際に適用しなさい。聖化された保証と率直さをもって真理を心に訴え、神がご自分の民の前に置かれた高い標準を提示しなさい。真理は受け入れる者にとってどの点から見ても真理でなければならない。それは心に印されなければならない。……

「心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして、主なるあなたの神を愛せよ」。これが神の要求なさる奉仕である。これこそ、純潔で汚れのない宗教である。心は存在のとりでである。だから、それが完全に主の側にあるのでなければ、敵は彼の陰險な誘惑によっていつもわたしたちに対して勝利を得るのである。

もし人生が真理の支配下におかれるなら、真理の力は無限である。思いはキリストにとらえられる。心の宝庫から、適切でふさわしい言葉が出てくる。特にわたしたちの言葉が守られる。(ビュー・アノド・ハルト 1899年2月21日)

4月9日

大切にされるべき聖書の光

「あなたの光とまことを送ってわたしを導き、あなたの聖なる山と、あなたの住まれる所にわたしをいらせてください。」(詩篇 43:3)

聖霊が神のみ言葉の教師の心に働かなければならないが、それは彼らが人々に真理を、キリストご自身がお与えになった明確で純粋な方法で与えることができるためである。このお方はそれをご自分のみ言葉によってばかりでなく、その生活の中で表わされた。……

この時代における世の人々は、あたかも自分たちが思いのままに、無限のお方のみ言葉に疑問をさしはさみ、このお方の決定や定めを見直し、裏付けたり、差し替えたり、造り直したり、無効にしたりする自由があるかのようにふるまっている。彼らは神の明白な決定を群集や自分たちが喜ぶように、曲解したり、誤解したり、あるいは変更したり、ゆがめたりできないと、それを破る。わたしたちは人間の意見に導かれている限り、安全ではない。しかし、「主はこう言われる」というみ言葉に導かれている限り、安全である。わたしたちは無謬の裁き主の決定より少しでも低い基準に自分の魂の救いを委ねることはできない。神を自分の導き手とし、そのみ言葉を自分の相談相手とする者は、命のともしびに従う。神の生ける託宣は彼らの足を、せまい道に導く。

このように導かれる者は、神のみ言葉を裁くようなことをせず、かえってこのお方のみ言葉が自分たちを裁くものだと考える。彼らは自分たちの信仰と宗教をこのお方のみ言葉から得る。それは彼らの道をみちびく案内であり、彼らの足のともしびであり、彼らの道の光である。彼らは、変化とか回転の陰のない光の父の指示の下に歩む。優しい憐れみがあらゆるみ手のわざに及んでいるお方は、正しい者の道を夜明けの光のようにし、いよいよ輝きを増して真昼となる光のようにしてくださる。(ビュー・アッド・ヘルド 1899年2月21日)

わたしたちには聖書を照らす光があるので、大切にしなかったあらゆる光に対して責任がある。多くの者の働きは受けてきた真理と調和していない。わたしたちの計画の中にもっとも多くの人間的な要素が持ち込まれている。わたしたちは聖霊が心と生活を変える力をもって働いてくださることにより頼んでいない。わたしたちは信仰に欠けており、これはまったく手の施しようがなく不思議である。真理の効力は、真理に従うことによって自分たちの魂を清めない人々の一連の行動によって弱められている。

主の秘密は、このお方を畏れ、その契約を守る者と共にある。わたしたちには神を信じる信仰が必要である。それは神のみ言葉の聖化する力の下で、人の兄弟愛の原則が現れるためである。わたしたちには聖霊の導きが必要である。思いと心に及ぶその力は、わたしたちが神の聖なるみ言葉の真理を提示できるようにする。健全な教理が実際に人の魂に触れるようになる結果は、健全にして人を高める実践である。イエスのうちにあるがままの真理が大切にされなければならない。そのときクリスチャンは名前だけのクリスチャンではなく、キリストの愛が彼らの生活に浸透する。(同上 1899年2月28日)

4月10日

真理はわたしたちを自由にする

「自由を得させるために、キリストはわたしたちを解放して下さったのである。だから、堅く立って、二度と奴隷のくびぎにつながってはならない。」(ガラテヤ 5:1)

わたしはわたしたちの諸教会のために案じている。彼らの会計報告のために、わたしは神のみ前に震えている。わたしたちには聖書を照らす光がある。そして大切にされていないあらゆる光に対して責任がある。……

わたしたちの不信仰とキリストに似ていない属性を追い払うために、聖霊の力が必要である。わたしたちには医師が必要であることを悟らなければならない。わたしたちは病気ででありながら、そのことを知らない。主がご自分の働きの心を改心させて下さるように！もし改心した牧会がひとつあれば、結果をごらんください。しかしわたしたちは自分の心を変えることはできない。この働きは聖霊の力によってのみなされ得る。働きの一つ一つの段階において、次のことを覚えていなさい。「万軍の主は仰せられる、これは権勢によらず、能力によらず、わたしの霊によるのである」。……

キリストは慰め主をわたしたちに送ると約束なされた。この慰め主の働きは魂のうちに神の王国を建設なさることである。これほど豊かな憐れみと恵みと平安の備えがなされているときに、人はなぜ真理をあたかも奴隷のくびぎのようにみなすのであろうか。それは主のいつくしみ深きことを心が味わったことも見たこともないからである。神のみ言葉の真理が、ある人々には束縛であると思われている。しかし人々を自由にするのは真理である。それゆえ真理があなたを自由にするのであれば、あなたは本当に自由なのである。真理は人をその罪から、またその人の悪を行う先天的後天的傾向から引き離す。キリストの愛をいただく魂は自由、光、喜びに満ちあふれる。そのような魂の内に二心は

なく、その人全体が神を慕い求める。彼は自分の義務を知るために人々のところへ行くのではなく、すべての知恵の源であるキリストのところへ行く。彼は自分が到達しなければならない標準を見出すために、神のみ言葉を調べる。

わたしたちはキリスト以上に確かな導き手を見つけることができるであろうか。真の宗教は思考と言葉と行為において、聖なるお方の導きの下にあることから成り立っている。道であり、真理であり、命であるお方は、へりくだり、真剣に、心を尽くして求める者を受け入れ、わたしに従って来なさい、と言われる。キリストは彼を聖潔と天へ向かう狭い道へ導かれる。キリストは自ら大きな代価を払ってわたしたちのためにこの道を開いてくださったので、わたしたちは暗闇の中で自分の道をつまづきながら歩くままに放っておかれることはない。イエスは、わたしたちの右側にいて、わたしは道であると宣言なさる。そして主に従おうと決心している者はみな、主にあがなわれた人々が歩むために敷かれた王路へ導かれるのである。……

主人のご用に間に合う器とは、どのような種類のものであろうか。それは空の器である。わたしたちが魂からすべての汚れをなくして空にするとき、用いていただく準備ができる。……聖霊が思いと心に働いて下さるとき、自己が死ぬとき、真理はたえず拡張と新しい発展を可能とさせる。(レビュー・アソド・ハラルド 1899年2月28日)

4月11日

そのみ言葉のうちに見られる神格の印

「キリストの言葉を、あなたがたのうちに豊かに宿らせなさい。」(コロサイ 3:16)

神のみことばの中に、地球の基礎をすえ、天を張った力を見る。人間の偏見と誇りに汚されていない人類歴史を発見できるのは、ただここだけである。ここに、世界最大の人物の苦闘と敗北と勝利とが記録されている。ここに、義務と運命の大問題が展開されている。見える世界と見えない世界を隔てている幕が揚げられて、罪が最初に侵入したときから、義と真理が最後に勝利するまでの善と悪の軍勢の争闘を見るのである。そして、すべては、神の品性の啓示に過ぎない。神の言葉に示された真理を敬虔な心で瞑想するとき、……思いは、無限の思いとの交わりに入れられる。こうした研究は、品性を洗練して高尚にするばかりでなく、知力を拡大し、活気づけずにはおかないのである。

聖書の教訓は、この生涯のあらゆる関係における人間の繁栄に、重大な関連を持っている。それは、国家の繁栄の礎石である原則を提示している。それは社会の幸福と密接に結びつき、家庭を保護する原則である。この原則を度外視しては、だれひとり現世で有用な人物として幸福になり、榮譽を受けることはできない。また、将来永遠の生命を受けることを望むこともできない。人生のどんな地位、どんな経験であつても、聖書は、それに対する必要な準備を教えている。神の言葉を研究して服従するならば、人間哲学のあらゆる分野の周到な研究にまさって、もっと強力で知性の活発な人物が、世に送り出されることであろう。それは、力と強固な品性をもった人物、鋭い洞察力と正しい判断の人、神の誉れ、世界の祝福となる人々を起こすであろう。

科学の研究においても、また、創造主の知識を得なければならぬ。す

すべての真の科学は、物質界における神の筆跡の解釈に過ぎない。科学は、その研究の中から、創造主の知恵と能力の新しい証拠をもたらすに過ぎない。自然の書物と書かれた言葉とは、正しく理解するならば二つとも神がお用いになる法則が、知恵と慈愛に満ちたものであることをわれわれに教えて、われわれを神に近づけるのである。……

啓示のページに明らかな神の印は、高山や、実り豊かな谷間、広く深い大海に見られる。自然界は、創造主の愛を人間に語る。(人類のあけぼの下巻 259～261)

4月12日

聖書という武器でサタンに立ち向かう

「わたしはあなたにむかって罪を犯すことのないように、心のうちにみ言葉をたくわえました。」(詩篇 119:11)

聖書から真理を学び、その光に歩み、そして他人にも自分の模範に従うように励ますことは、すべて理性のある者の第一にして最高の義務である。われわれは日々熱心に聖書を研究し、すべての思想を熟考し、聖句と聖句を対照すべきである。われわれは神の前で自分で答えるのであるから、神の助けによって自分で自分の考えを定めなければならない。……

聖書の真理に対する理解は、研究に払われる知力によるよりは、むしろ誠実な意図と、義を熱心に追い求める心にかかっているのである。

聖書は祈りなしに研究すべきではない。聖霊だけが、理解しやすい事柄の重要性を感じさせ、あるいは理解の困難なものを曲解しないように守る。われわれがみ言葉の美しさに心をひかれ、その警告に戒められ、み約束によって活気づけられ、力づけられるように、心を備えさせて神のみ言葉を理解させるのが、天使たちの働きである。われわれは詩篇記者の「わたしの目を開いて、あなたのおきてのうちのくすしき事を見させてください」という訴えを、自分のものとしなければならない(詩篇 119:18)。

試みがしばしば抵抗できないもののように見えるのは、祈りと聖書研究を怠っているために、試みられている者が神のみ約束をすぐに思い出すことができず、聖書という武器をもってサタンに対抗することができないからである。しかし天使たちは、神の事柄を喜んで学ぼうとする人々のまわりにおいて、緊急の場合には必要な真理を思い起こさせる。こうして、「敵が洪水のように押し寄せるときに、主の霊はそれに向かって旗をあげられる」(イザヤ書 59:19 英語訳)。

イエスは、「助け主、すなわち、父がわたしの名によってつかわされる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、またわたしが話しておいたことを、ことごとく思い起させるであろう」と弟子たちに約束された(ヨハネ14:26)。しかし、危機の時に、神のみ霊がわれわれにキリストの教えを思い起こさせてくださるためには、それをあらかじめ心の中にたくわえておかねばならない。……

われわれは世界歴史の最も厳粛な時代に生存している。地上のおびただしい数の人々の運命が、決定されようとしている。われわれ自身の将来の幸福も、他の魂の救いも、今われわれが歩いている道にかかっている。われわれは真理のみ霊によって導かれる必要がある。……。われわれは今、神のことについて、深い、生きた経験を求めなければならない。一刻もむだにはできない。われわれの周囲には重大な事件が起こっており、われわれはサタンの魔法の働いている場にいるのである。……眠ってはいけない。(各時代の争闘下巻 365～369)

4月13日

研究の報い

「しかも、もし知識を呼び求め、悟りを得ようと、あなたの声をあげ、銀を求めのように、これを求め、かくれた宝を尋ねるように、これを尋ねるならば、あなたは、主を恐れることを悟り、神を知ることができるようになる。」(箴言 2:3～5)

聖書は、熱心に研究し、精密にしらべるべきものである。なまけ者が真理の明確な理解を持つようになることはあり得ない。この世の中のどんな幸福も、熱心に耐え忍んで努力することなしに得られるものではない。どんな事業においても成功をおさめようとするれば、物事をしようとする意志と、必ず実がみのるという確信とがなければならない。霊的知識も、熱心な努力なしに得られるものではない。真理の宝を見いだそうと願うものは、鉱夫が地中に隠された宝を掘るように、自分で掘っていかなければならない。中途はんぱなことではだめである。老いも若きも、神のことばを読むだけでなく、隠してある宝のように、祈りとともに真理を探究し、全心を打ちこんで研究することがたいせつである。こうする人びとは、必ず報いられる。それは、キリストが理解力を深めてくださるからである。……

キリストの精神をもって、聖書を探究するものには、必ず報いが与えられる。人が幼児のようにすなおな態度で教えを受け、神に全的に服するならば、神のことばの中に真理を見いだすことができる。人びとが従順になるときに、神の政府の計画を理解することができるようになるのである。探究者の前には天上の世界の美と栄光とがますます輝かしく開かれることであろう。そのとき、人類は、現在とは全く変わったものとなることであろう。というのは、真理の探究は、人間を高めるからである。贖罪、キリストの受肉、キリストの贖罪の犠牲などの神秘は、現在のように思いの中でばく然としたものではなくなる。

このような問題に対して、わたしたちは、更に理解を深めるばかりでなく、その真価をより高く評価することができるようになる。

キリストが、父なる神に祈られた祈りの中に、わたしたちが忘れてはならない教訓が教えられている。このお方は「永遠の命とは、唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがつかわされたイエス・キリストとを知ることです」といわれた(ヨハネ 17:3)。これが真の教育である。これが、人に力を与えるものである。神と、神がつかわされたイエス・キリストを体験によって知るとは、人間を神のみ姿に変えるのである。これは、人を自己を治めるものにする。低い性質の衝動と欲望とは、高度の意志の力に支配されるようになる。そして、それは、また、彼を神の子すなわち、天国の相続人とし、無限の神との交わりに入れ、宇宙の豊富な富を開いて見せるのである。

これが神のことばの探究によって得られる知識である。そして、この宝は、それを得ようとしてすべてをささげる者なら、だれにでも見いだすことができるものである。(キリストの実物教訓 86～91)

4月14日

祈りを通して得られる神の力

「朝はやく、夜の明けるよほど前に、イエスは起きて寂しい所へ出て行き、そこで祈っておられた。」(マルコ 1:35)

イエスの一生ほど骨折りと責任で多忙な生活はほかになかった。それなのに、祈っておられるイエスの姿がどんなにかしばしば見受けられたことだろう。彼はどんなにしじゅう神とまじわられたことだろう。キリストの地上生涯の歴史には、次のような記録がいくつもみられる。……「おびたしい群衆が、教えを聞いたり、病気をなおしてもらったりするために、集まってきた。しかしイエスは、寂しい所に退いて祈っておられた」「このころ、イエスは祈るために山へ行き、夜を徹して神に祈られた」(ルカ 5:15, 16; 6:12)。

他人の幸福のために全的にささげられた生涯において、救い主は、旅の往來と、毎日毎日ご自分についてくる群衆から退くことが必要であることに気がつかれた。ひっこんでだれにも邪魔されないうで天父とまじわるために、イエスはたえまない活動の生活と人間のいろいろな必要との接触から離れられねばならなかった。イエスは、われわれと同じおかた、われわれの必要と弱さを共にされるおかたとして、全的に神によりたのまれた。そして義務と試練に対して張り切って出て行くために、イエスは、ひそかな祈りの場所で、神の力をお求めになった。罪の世にあつて、イエスは、魂の戦いと苦しみに耐えられた。主は、神とまじわることによって、ご自分に重くのしかかっている悲しみの重荷をおろすことがおできになった。そこにイエスは、慰めとよろこびをみいだされた。

キリストを通して、人類の叫びは限りなくあわれみ深い天父に達した。人としてキリストは、人性と神性とを結合する天来の電流によって、ご自分の人性が充電されるまで、神のみ座に嘆願された。世の人々にいのちを与えるために、

イエスはたえまないまじわりを通して神からののちを受けられた。イエスの経験がわれわれの経験となるのである。

「さあ、あなたがたは、人を避けて」とイエスはわれわれに命じられる。イエスのみことばに留意するとき、われわれはもっと強く、もっと役立つ者となる。

……

神の訓練を受けているすべての者のうちには、世とその慣例や習慣に一致しない生活があらわされる。だれでもみな、神のみどころを知るために、個人的な経験をする必要がある。われわれは、神が心に語られるのを個人的にきかねばならない。ほかの声はみな沈黙して、静けさのうちに神の前に待つとき、魂の静寂は神のみ声を一層明らかにする。神は、「静まって、わたしこそ神であることを知れ」とわれわれに命じておられる（詩篇 46:10）。

ここにだけ真の休息がみいだされる。これこそ神のために働くすべての者にとって効果的な準備である。あわただしい群衆の中にあつて、人生の激しい活動の緊張のうちにあつて、このように活気づけられた魂は、光と平和の雰囲気にとりかこまれる。その生活はかぐわしい香りを放ち、人々の心に達する神の力をあらわすのである。（各時代の希望中巻 100 ～ 102）

4月15日

待ち、見張り、祈りなさい

「主を待ち望め、強く、かつ雄々しくあれ。主を待ち望め。」(詩篇 27:14)

主を待ち望め、わたしはくりかえし言うが、主を待ち望め。わたしたちは人間の代理人に求めて受けることができないことがあるかもしれないが、神に求めることができる。そして、このお方は、あなたは受けると言われる。であれば、あなたはだれを見て、だれを信頼すべきかがわかる。あなたは人間に信頼したり、肉なる者を自分の腕としたりしてはならない。あなたは全能者に好きなだけ重さをかけて寄りかかることができる。このお方は「わたしの保護にたよって、わたしと和らぎをなせ、(そうすれば)わたしと和らぎをな」すと言われた。そうであれば、待ち、見張り、祈り、働き、あなたの顔を絶えず義の太陽に向けていなさい。

イエスのみ顔からの明るい光線があなたがたの心の内を照らし、あなたがたを通して他の人々を照らすようにしなさい。「あなたがたは世の光である。……そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かし、そして、人々があなたがたのよいおこないを見て、天にいますあなたがたの父をあがめるようにしなさい」(マタイ 5:14～16)。わたしたちは人々の前にイエスを掲げなければならない。……

あなたが人に正しく理解され、支えてもらおうとしっかりより頼む分だけ、あなたはことごとく失望することになる。あなたの励ましと支えは最上の人からもたらされるのではない。主はあなたに教えるべき教訓、ただこのお方のみにより頼むべきだという教訓を持っておられる。なぜなら、このお方はあなたの贖い主だからである。あなたはこのお方の所有一創造と贖いによってこのお方のものである。主の道を選び、主の意志をあなたの意志とすべきである。……

聖者はすべての人の導きとしてわたしたちのために規則を与えて下さった。これらの規則は逸脱のあり得ない標準を形成している。聖潔の原則をなお日ごとに学ばなければならない。そのとき、神のみ旨が最高位になる。神のうちにあなたは立つことができ、神のうちに積極果敢な戦いをなし、イエスのうちにあるがままの真理を提示することができる。

聖霊の働きの下で心を和らげることを少しも恥じてはならない。イエスが入ろうとして戸をたたかれるとき、このお方をお入れし、このお方に感謝し、心のうちに喜び、あなたが救う腕がないと感じていたときにこのお方のみ腕が救いをもたらし、このお方の愛があなたに表されたことを絶えず感謝する心を奨励しなさい。それから、その愛の完全な喜びのうちにイエスを他の人々に紹介したとき、聖霊が他の人々を祝福するために、あなたを通して働いておられたのである。真理をその単純さのうちに提示し、本当に戸惑い、困惑して震えている人の心に手を伸べることは、真理の御霊を受けるすべての人の特権である。……彼はどのように乳香を塗るかを知っている。……

神にまったく信頼しなさい。祈りなさい、祈りなさい、祈りなさい、信仰のうちに祈りなさい。それから自分の魂の守りを神に委ねなさい。このお方はかの日に至るまで、ご自分に委ねられたものを守って下さる。……神に完全に、揺らぐことなく信頼しなさい。(手紙 126, 1895 年)

4月16日

神と人との勝つ力

「わたしは顔と顔をあわせて神を見たが、なお生きている。」(創世記 32:30)

今、少ししか信仰を働かせていない者は、サタンの欺瞞の力と良心を強制する法令の下に屈してしまう危険が多分にある。そして、たとい彼らが試練に耐え得ても、常に神に信頼する習慣を養ってこなかったために、悩みの時には、さらに大きな苦難と苦悩に陥ることであろう。彼らは、自分たちが学ぶことを怠っていた信仰の教訓を、恐るべき失望のもとにあつて学ばなければならなくなる。

われわれは今、神の約束を試すことによって、神をよく知らなければならぬ。天使は心からの熱心な祈りをすべて記録している。われわれは、神との交わりを怠るよりも、利己的な満足を求めることをやめるべきである。神の是認の下にある最低の貧困、最大の自己犠牲は、是認のない富、栄誉、安楽、友情にまぎっている。われわれは、時間をかけて祈らなければならぬ。もしわれわれが世俗のことに心を奪われているならば、主は、金、家屋、肥えた土地などの偶像を、われわれから取り去ることによって、われわれに時間をお与えになるかもしれない。

もし青年が、神の祝福を求めることができる道のほかには、どんな道に入ることをも拒むならば、罪に誘われることはない。世界に最後の厳粛な警告を伝える使命者たちが、冷淡で無気力で怠惰な態度でなくて、ヤコブのように、熱烈に、信仰をもって神の祝福を祈り求めるならば、「わたしは顔と顔をあわせて神を見たが、なお生きている」と言うことのできる多くの場所を見いだすであろう。天は彼らを、神と人との勝つ力をもった王子たちとみなすのである。

.....

今、われわれの大祭司がわれわれのために贖いをしておられる間に、われ

われは、キリストにあつて完全になることを求めなければならない。救い主は、その思いにおいてさえ、誘惑の力に屈服されなかった。……キリストはご自身について、「この世の君が来る。だが、彼はわたしに対して、なんの力もない」と宣言された(ヨハネ 14:30)。(各時代の争闘下巻 395～397)

キリストとその弟子たちによって、奇跡が行なわれなかったであろうか。その同じあわれみ深い救い主が、今日も生きておられて、ご在世のころと同様に信仰の祈りに喜んで耳を傾けてくださるのである。自然が超自然と協力するのである。われわれがこのようにして求めなければ与えられないものが、信仰の祈りにこたえて、われわれにさずけられることが、神のご計画の一部である。(同上 269, 270)

祈りを怠っては、一日、一時間たりとも安全ではない。……こうして常にサタンの策略に注意する一方、たえず、「わたしたちを試みに会わせないで……下さい」と信仰をもって祈らなければならない。(同上 276)

4月17日

祈る信者たちが 世をとり囲むべきである

「また、イエスは失望せずに常に祈るべきことを、人々に譬で教えられた。」(ルカ 18:1)

兄弟姉妹がたは、わたしたちが永遠の世界の目前に生存していることを覚えていよう。すべての人の裁きが天の法廷で行われている。そして今こそ罪を捨て去り、熱心にできるだけ多くの人々を救うために働くべき時である。

神の民の間で、現代、しばしば真心からの熱心な祈りの時が持たれるべきである。思いは絶えず祈りの態度のうちにあるべきである。家庭でまた教会で、み言葉の宣布に献身した人々のために熱心な祈りが捧げられるようにしよう。信徒たちは弟子たちがキリストの昇天後に祈ったように祈ろう。

わたしたちの諸教会のメンバーは改心し、もっと霊的な思いを持つ者となる必要がある。熱心に祈る信徒たちの鎖が世を取り囲むべきである。すべての人がへりくだりのうちに祈ろう。数人の隣人たちは聖霊を求めて共に祈るために集まることができる。家庭を離れることのできない人たちは子供たちを中に集めて、共に祈ることを学ぶために一つになりなさい。彼らは救い主の約束を主張することができる。「ふたりまたは三人が、わたしの名によって集まっている所には、わたしもその中にいるのである」(マタイ 18:20)。……

神の民の祈りに答えて、天使たちは天の祝福を持って遣わされる。主はわたしたちが自分たちの伝道の努力においてもっと成功することを願っておられる。日ごとの祈りと献身を通して、すべての人は自らを天父に結びつけることができ、それによってこのお方は豊かな祝福を自分たちに与えて下さることがおできになる。

特に信仰において若い人々は、はっきり目覚めて、サタン戦略に対して防

御している必要がある。彼らは断固として大いなる贖罪の犠牲を信じる揺るがない信仰に忠実でなければならない。彼らは罪のうちにいつづける必要はない。祈りを通して彼らは勝利させてくれる恵みを受けることができる。……

神の民があら探しをするのに使う時間が、互いに励まし、活発な奉仕に用いられるならば、どれほどはるかに多くのことが成し遂げられることであろうか! 声を祈りと聖なる斉唱に合わせる方が、あら探しに用いるより、どれほど良いことであろうか! (ビュー・アンド・ワールド 1907年1月3日)

キリストの教会、また、クリスチャン個々の最大の勝利は、才能や教育、あるいは富、または人間の援助によって得られるものではない。その勝利とは、神との交わりの部屋で熱心に苦闘する魂が、信仰によって力強いみ腕をつかむときに得られる。(人類のあけぼの上巻 221)

わたしたちに最も欠乏しているのは……心からの祈り、すなわち神の改心させる力を求めて信仰のうちに捧げる神への祈りである。……民が必要としているのは、知能の力でも、財力でもなく、心の力である。(手紙 1890年 20)

4月18日

祈りはいついかなる場所でも適切

「何事でもわたしの名によって願うならば、わたしはそれをかなえてあげよう。」

(ヨハネ 14:14)

神に祈りをささげるのに、不適當な時とか場所とかはない。熱心な祈りの精神をもって心を天に向けるのに妨げとなるものはなにもないのである。雑踏した路上でも、商取引の最中でも、ちょうどネヘミヤがアルタシャスタ王の前で自分の願いを告げたときのように、神に願いをささげて導きを請うことができる。祈祷の密室はどこにでもある。わたしたちは、絶えず心の戸を開いて、イエスに天来の客として心のうちに住まわれるよう招待しなければならない。

たとえわたしたちは、汚れた腐敗した空気につつまれていても、その毒気を吸う必要はなく、天のきよい空気の中に生きることができる。真剣に祈って心を神の前に高め、不潔、不正な思いが入らぬようあらゆる戸を閉じることができる。神の助けと祝福を受けようと心を開いている者は、この世の雰囲気よりきよい雰囲気の中を歩き、天と絶えざる交わりを続けることができる。

わたしたちはイエスをもっとはっきりながめ、永遠なるものの価値をもっと十分に知らねばならない。神の子らの心は、きよい美しさに満たされなければならない。そして、これが成就するために、わたしたちは天の事柄をあらわしていただくよう神に求めなければならない。

神が天の雰囲気の一息でも呼吸させてくださるよう、心を世より離して天へ向けよう。もし、わたしたちが神のそば近くにいれば、どんな試みが不意におそってきても、ちょうど花が太陽の方を自然に向いているようにわたしたちの心も神に向くようになる。

どんな望み、喜び、悲しみ、わずらい、恐れもみな神の前におこう。なにももってきても重すぎたり、神を疲れさせたりすることはない。頭の髪の毛で

さえ数えられる神は、ご自分の子らの必要に無関心ではないのである。「主が
いかに慈愛とあわれみとに富んだかたであるかが、わかるはずである」(ヤコ
ブ 5:1)とある。愛にみちた神のみ心は、わたしたちが悲しみを口にしてさえ心
をいためるのである。心をわずらわすことはなんでも神に申し上げよう。神は
諸世界をささえ、全宇宙のすべてを支配しているのであるから、神にとって大
き過ぎてささえきれぬというものはない。

わたしたちの平和にかかわることであるならばどんなことでも、このお方に
とって小さすぎてお気づきにならないということはない。わたしたちのどんなに
暗い経験も、暗すぎてお読みになれないということはない。またどんなに難
問題でも、神には解釈できないということはない。……神と各々の魂との関係
は、あたかもこの地上にはこのお方の見守りを分かち合う魂が他にないかのよ
うに、また神がただそのひとりのために愛するみ子をお与えになったかのごと
くに、はっきりとした完全なものである。(キリストへの道 136～138)

4月19日

愛によって働く信仰

「心をつくして主に信頼せよ、自分の知識にたよってはならない。」(箴言 3:5)

わたしたちが信仰について語るとき、信仰には区別があることを心にとめておかねばならない。つまり、ほんとうの信仰とは全く違った一種の信仰があるということである。神の存在とその力、み言葉の真理であることは、悪魔もその軍勢も心のうちでは否むことのできない事実である。聖書には「悪霊どもでさえ、信じておののいている」(ヤコブ 2:19)とあるが、これは信仰ではない。神のみ言葉を信ずるというばかりでなく、神に意志を服従させ、心をささげ愛情を注いでこそ、信仰があるといえるのであって、そうした信仰は、愛によって働き、魂をきよめるのである。

この信仰によって、心は神のみかたちに造りかえられる。新たにされない心は、神のおきてに従いもしなければ、実際、従うこともできないのであるが、信仰によって新たにされた今は、きよいいましめを喜び、詩篇記者とともに「いかにわたしはあなたのおきてを愛することでしょう。わたしはひねもすこれを深く思います」(詩篇 119:97)とすることができる。そしておきての義が「肉によらず霊によって歩く」(ローマ 8:4)わたしたちのうちに全うされるのである。

世にはキリストのゆるしの愛を知り、ほんとうに神の子になりたいと望んでいながら、自分の性格が不完全で、生活にはあやまちが多いために、いったい自分の心が聖霊によって新たにされたかどうかと疑う人がある。こうした場合に決して失望、落胆してはならない。わたしたちは幾たびとなく、欠点やあやまちを悔いて、イエスの足もとに泣き伏すことであろう。けれども、そのために失望してはならない。たとえ敵に敗れても、神に捨てられ、拒まれたのではない。否、キリストは神の右に座してわたしたちのために執り成しをしてくださ

るのである。使徒ヨハネは「わたしの子たちよ。これらのことを書きおくるのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためである。もし、罪を犯す者があれば、父のみもとには、わたしたちのために助け主、すなわち、義なるイエス・キリストがおられる」(ヨハネ第一 2:1)と言った。

また「父ご自身があなたがたを愛しておいでになるからである」(ヨハネ 16:27)というキリストのみ言葉も忘れてはならない。神は、あなたをご自分に立ち帰らせ、御自らの純潔と聖潔とをあなたのうちに反映しようと望んでおいでになる。ただ神に従いさえすればすでにあなたのうちによきことをはじめてくださった神は、イエス・キリストの日までその働きを続けてくださるのである。

.....

自分の無価値なことを悟れば悟るほど、救い主の限りない純潔とうるわしさとがわかってくる。自分の罪深いことを知ってゆるしをお与えになる救い主のもとに走りより、魂の力なさを悟ってキリストに手をのべる、すると、キリストはあらわれ力をそえてくださるのである。必要に迫られ、キリストと神のみ言葉に近づけば近づくほど、わたしたちはキリストの品性をもっとよく知るようになり、そのみかたちをもっと十分に反映するようになる。(キリストへの道 83～87)

4月20日

信仰によって すべてはわたしたちのものである

「すべては、あなたがたのものなのである。……そして、あなたがたはキリストのもの、キリストは神のものである。」(コリント第一 3:21～23)

神の御子が与えられたのは、罪ある者のための犠牲として、あるいは失われた者の贖い主としてばかりではない。このお方を通してすべてのものがわたしたちのものである。キリストを信じる信仰を持つ者、このお方のご命令に従順な者は、経験によって、わたしたちがキリストのものであり、キリストがわたしたちのものであるという絶えざる証言をわたしたちに与える力の無限さを知るようになる。救い主はわたしたちに嗣業の認可書を与えて下さった。そしてわたしたちは、自分の分としてキリストを選んだがゆえに、有利な立場に立っている。

このお方のみ言葉に従順な者は、この証拠—イエスのうちにあるがままの真理の保証—を受けることができる。もしわたしたちが自分たちに与えられてきた信仰の証拠を熟考するように自分たちの思いを習慣づけるなら、見えないお方を見るようにして耐え忍ぶことができる。イエスと共に歩む者は、言葉に表せない喜びと満ちみちた栄光に喜ぶことができる。……

永続的な信仰、継続的な従順が、このお方の愛のうちに居続けるために不可欠である。……わたしたちは神の口から出る一つ一つの言葉によって生きるべきである。そのとき、イエスのうちにあるがままの真理、すなわちこのお方のご品性のうちに具体化された真理が、わたしたちの生活に、わたしたちの精神に、言葉に、気質に表現されるようになる。真理が思いの律法となる。栄光の望みであられるキリストが内にかたちづくられるのである。

変えられた魂と神の間には、特別に緊密な結合がある。この結合を描写する言葉を見出すことはできない。それは真に信じる者にとって、金銀よりも無

限に価値のある宝である。

クリスチャンはつねに自分の前に救い主を見る。そして眺めることによって、彼は栄光から栄光へと同じ姿へ変えられていく。彼は神の印章をおびている。わたしたちはこれを哲学という科学のために放棄するのであろうか。断じてそうではない。真理は神のすがたに似る富に満ちみちている。神性にあずかる者は真理を固くつかんでいる。彼は決して手放すことをしない。なぜなら、真理が彼を捕らえているからである。

わたしたちは自分が日々形成している品性によって、自分の将来の運命を決定していることを決して忘れないようにしよう。心がキリストの愛に満たされている者は、天の宮廷に喜んで迎えられるのである。……

このお方の御目には神の子らの霊性こそ彼らの栄光である。これが彼らを区別し、世から分離させるしるしである。……わたしたちは、世にキリストを表すことができるために、義に飢え渴かなければならない。もしこのお方の愛がわたしたちの心のうちに宿っているなら、それがはっきりと表されるようになる。わたしたちは世における光となる。キリストはすべてご自分に従う者に、ご自分の徳を品性に表し、言葉と行為にご自分を代表し、このお方の愛を知らせよう求めておられる。(原稿 84, 1905 年)

4月21日

信仰によって卓越さは発達する

「だれでも新しく生れなければ、神の国を見ることはできない。」(ヨハネ 3:3)

わたしは、救われるために、何をすべきかと、あなたは、おたずねになるであろうか。それでは、あなたは、まず研究にはいるにあたって、先入観、すなわち自分のもっている先天的、後天的の考えを捨てなければならない。自分の意見を支持する目的で、聖書を探究するならば、決して真理を発見することはできない。主は、いったい、なんとおっしゃられるかということをおぼろげに探究しなければならない。探究しているうちに、強く心に感銘を受け、たとえ、自説が真理と一致していないことがわかって、それに合わせようとして、真理を曲解せずに、与えられた光を受け入れなければならない。神のことばの中から驚くべきものを見ることができるよう、心を開かなければならない。

キリストを世の救い主として信じるためには、啓発された知力を認めなければならない。そして、その知力は、天の宝を見つけて、その真価を認め得る心に支配されたものでなければならない。この信仰は、悔い改めと心の変化とも切り離すことができない。信仰をもつことは、発見された福音の宝に含まれているすべての義務とともに、福音を受け入れることである。

「だれでも新しく生れなければ、神の国を見ることはできない。」人間はいろいろと推測したり想像したりはできても、信仰の目がないならば、宝を見ることはできない。キリストは、わたしたちのためにこのはかり知れない尊い宝を確保するために、その生命をお与えになったのである。しかし、キリストの血を信じる信仰による新生が伴わないならば、それは滅び行く魂にとって、罪の許しにも宝にもならないのである。

神のことばの真理を理解するためには、聖霊の光に照らされなければならない。太陽が暗黒を追いやって、光を降り注ぐのでなければ、自然界の美を見ることができない。そのように、神のことばという宝も、義の太陽の輝かしい光によってあらわされなければ、認めることはできない。

無限の愛という慈悲によって天から送られた聖霊は、キリストに絶対的信仰を抱いているすべての者に、神に関することを啓示する。そのみ力によって魂の救いに関する重大な真理が人の心に強く印象づけられる。こうして生命の道はふみあやまることができないほど明らかにされるのである。……わたしたちが聖書を研究するときには神の聖霊の光がみことばを照らし、わたしたちがみことばの宝をみとめて、理解できるように祈り求めなければならない。(キリストの実物教訓 88, 89)

キリストを信じる信仰によって、品性のあらゆる欠陥が補われ、あらゆる汚れが清められ、あらゆる欠点が直され、そしてあらゆる美德が発達させられるのである。(教育 304)

4月22日

信仰は一人びとりの魂にとって盾である

「その上に、信仰のたてを手に取りなさい。それをもって、悪しき者の放つ火の矢を消すことができるであろう。」(エペソ 6:16)

信仰とは神に信頼すること、すなわち神がわれわれを愛し、われわれの幸福にとって最善であるものをご存知であることを信じることである。そのときわれわれは自分自身の道を選ばず、神の道を選ぶようになる。信仰によってわれわれは、無知の代わりに神の知恵を受け入れ、弱さの代わりに神の力を、罪の代わりに神の義を受け入れる。われわれの生命、われわれ自身がすでに神のものである。信仰は神の所有権をみとめ、その祝福を受け入れる。真実と誠実と純潔は人生の成功の秘訣としてさし示されている。これらの原則をわれわれに所有させるのが信仰である。

善への衝動や抱負はすべて神の賜物である。信仰によって神から与えられる生命だけが真の成長と実力を生ずることができる。

どのように信仰を働かせるべきかということを明らかにしなければならない。神の御約束にはすべて条件がある。われわれが神のみこころをよろこんで行なうとき、神のすべての力はわれわれのものである。神が約束して下さった賜物はすべての約束自体の中に含まれている。「種は神の言である」とある(ルカ 8:11)。かしの木がどんぐりの実の中に含まれているのと同じように神の賜物もその御約束の中に確実に含まれている。約束を受け入れるときに、賜物はわれわれの手中にある。

神の賜物を受け入れることのできる信仰は、それ自体が賜物であり、それはすべての人に幾分か与えられている。神のみ言葉をわがものとするために信仰を働かせるときに信仰は成長する。信仰を強めるためには、神のみ言葉にたびたび接触しなければならない。聖書研究においては、生徒が神のみ言葉

の力をみとめるように導くべきである。創造の時に「主が仰せられると、そのようになり、命じられると、堅く立ったからである」とある（詩篇 33:9）。……

人間的な見地からすれば、人生はだれにとってもまだ通ったことのない道である。深い経験という点からいえば、人生はひとりびとりが自分で歩かなければならない道である。われわれの精神生活には他人はどこまで行っても入りこむことはできない。幼い子供がおそかれ早かれ自分自身の道を選び、人生の問題を自ら永遠に決定しなければならない旅に出発するにあたって、われわれは確かな案内者であり、かつ助け主である神に子供の信頼を向けさせるように熱心に努力しなければならない。

誘惑から保護し、純潔と真理への靈感をあたえるものとして、神のみ前にあるという意識に匹敵するほどの力を持ったものは他にない。「すべてのものは、神の目には裸であり、あらわにされているのである」とある。神は、目が清く、悪を見られない者、また不義を見られない者」である（ヘブル 4:13 ハバクク 1:13）。この思いがエジプトの腐敗の中にあるヨセフを守ったのである。誘惑のささやきに対して彼は「どうしてわたしはこの大きな悪をおこなって、神に罪を犯すことができましょう」ときっぱり答えた（創世記 39:9）。このような盾、すなわち信仰が心の中に宿っているなら、どの魂も守られるのである。（教育 299～302）

4月23日

信仰はわたしたちを 王統にふさわしい者とする

「さて、信仰とは、望んでいる事がらを確信し、まだ見ていない事実を確認することである。」(ヘブル 11:1)

自分自身はどんなに無力でも、神のみ言葉に信頼するときに全世界の勢力に対抗し得た例は少なくない。純潔な心の持ち主で、聖なる一生を送ったエノクは、信仰を堅く保って、腐敗とあざけりに満ちた世代に対して義の勝利を納めた。ノアとその家族は当時の人々―最も偉大な知力と体力を持ちまた道徳的に最も堕落した人々に対抗した。紅海に臨んだイスラエルの民は、おびえた無力な奴隷の群れであったが、地球上で最大の国家の軍勢に対抗した。神から王位を約束されていた羊飼いの少年ダビデは、国王としての権力をかたく握って離さないサウルに対抗した。燃える火の中のシャデラクとその仲間、王座のネブカデネザルに、ししの群れの中のダニエルは王国の高い地位にある敵どもに、十字架上のイエスは、ローマの総督にさえ自分たちの意志を強行させようとするユダヤの祭司や役人たちに、鎖につながれて罪人として処刑されたパウロは世界帝国の暴君ネロに、それぞれ対抗したのであった。

このような例は、聖書だけに見られるとはかぎらない。人類の進歩の歴史にはどこにでもこのような例がたくさんある。ワルデンセスやユグノー教徒、ウイクリフやフス、ジェロームやルーテル、チンダルやノックス、チンツェンドルフやウェスレーその他多くの人々が悪を支持する人間の権力や政治に対して神のみ言葉の力を立証したのである。こういう人々こそ世の真の貴族である。彼らこそ世の王統である。今日の青少年たちは、この王統の一族となるように召されているのである。

人生の小事においても大事における場合と同じく信仰が必要である。日常

のすべての利害関係や職業において、神により頼んで変わらないときに、神の力が実際にわれわれをささえるのである。……

おく病な子供は恐怖心のために人生を重荷に感じるが、それは神のみ前にあるという意識によってのみ払いのけることができる。「主の使は主を恐れる者のまわりに陣をしいて彼らを助けられる」という御約束を彼の記憶にぎざみこむがよい。山の都市で、エリシャと武装した敵の軍勢との間を天使の大軍勢がとりまいていたというおどろくべき話を彼に読ませるがよい。死刑を宣告されて獄中にあったペテロに神の天使があらわれ、武装した番兵と重い戸とかんぬきのかかった鉄の大門を通りすぎて、この神のしもべを安全に連れ出したことを読ませるがよい。……

今日も神は、神の能力の器となる信仰心のあるところには、昔働かれた時と同じようにめざましく働かれるのである。(教育 300 ~ 303)

4月24日

どのように霊的な強さを得るか

「聖書を調べなさい。あなたがたは、聖書の中に永遠の命があると思って調べているが、この聖書は、わたしについてあかしをするものである。」(ヨハネ 5:39 英語訳)

聖霊は真に神のみ言葉を探る一人びとりのかたわらにいて、彼が真理の隠れた宝を発見できるようにする。神聖な啓発が彼の思いに及び、彼に真理をあらたに新鮮な重要性をもって印象づける。彼はかつて感じたことがないほどの喜びに満たされる。神の平安が彼にとどまる。真理の尊さがかつてなかったほど実感する。天来の光がみ言葉を照らし、それはあたかも一文字一文字が金の色合いを帯びているかのように見える。神ご自身が心に語りかけ、ご自分のみ言葉を霊と命にして下さる。

永遠の命とは聖書の中にある生きた要素を受け入れることであり、神のみ旨を行うことである。これが、神の御子の肉を食べ、血を飲むという意味である。み言葉を研究することによって天のパンにあずかり、霊的な腱や筋肉を得ることはすべての人の特権である。……

豊かな宴が、キリストを個人的な救い主として受け入れる人々の前に用意されている。日々、彼らはこのお方のみ言葉にあずかり、栄養を受け、強められる。

なぜ神の民は偉大な教師の言葉をやり過ごすのであろうか。なぜ彼らは次のような大いなる重要な約束がありながら、助けや慰めを求めて人間に頼るのであろうか。「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者はわたしにおり、わたしもまたその人におる。生ける父がわたしをつかわされ、また、わたしが父によって生きているように、わたしを食べる者もわたしによって生きるであろう。……このパンを食べる者は、いつまでも生きるであろう」。……

自分たちのために備えられた宴にあずかる人々は、最も価値のある経験を

得る。彼らは神のみ言葉と比較するとき、人の言葉は麦に対するもみ殻であることを認める。

わたしたちの立てるすべての計画において、まったく神に依存して行動しなければならない。さもないとわたしたちは現実の代わりに見せかけによって欺かれてしまう。……

体内の排泄物のゆえに、血液は絶えず食物によって新たにされていなければならない。霊的な命も同様である。み言葉を日々受け入れ、信じ、行動しなければならない。キリストがわたしたちのうちに宿り、存在全体に精力を与え、魂の命を新たにしておさなければならない。このお方の模範がわたしたちの導きとなるべきである。わたしたちが互いを扱うにあたり、このお方の同情を表さなければならない。わたしたちの心のうちでキリストの恵みの実際的な働きがなくてはならない。そのとき、わたしたちは使徒と共に、「生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである」と言うことができる。魂のうちに宿るキリストの命が、喜びの源であり、わたしたちの栄光の保証である。(ビュー・アソド・ハラド 1901年10月1日)

4月25日

キリストの代表である聖霊

「しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってつかわされる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、またわたしが話しておいたことを、ことごとく思い起させるであろう。」(ヨハネ 14:26)

キリストがご自身を自分たちに表しながら、なお世には見えないということは、弟子たちにとって神秘であった。彼らは霊的な意味において、キリストの言葉が理解できなかった。彼らは外面、目に見える現れを考えていた。彼らは自分たちと共にキリストのご臨在を得ることができるのに、世にはこのお方が見えないという事実をとらえることができなかった。彼らは霊的な現われの意味を理解しなかった。

偉大な教師は弟子たちにできる限りの励ましと慰めを与えたいと切望された。なぜなら、彼らが厳しく試されることになるからであった。しかし、彼らにとってこのお方のみ言葉を理解することは難しいことであった。彼らはまだこれから、ことごとく愛の従順に香る内なる霊的な命が、彼らの必要としている霊的な力を与えるのだということを学ばなければならなかった。

慰め主の約束は彼らに豊かな真理を提示した。それは彼らに最も厳しい状況の下でも彼らが信仰を失わないことを保証した。聖霊はキリストの御名によって送られ、彼らにあらゆることを教え、あらゆることを彼らに思い起こさせるのであった。聖霊は、キリスト、すなわち絶えず墮落した人類のために嘆願しておられる弁護人を代表するのであった。このお方は、神と人のあらゆる敵よりも力強いお方の力によって、彼らが自分たちの霊的な敵に勝利できるため彼らに霊的な力が与えられるよう嘆願なさる。

始めから終わりをご存じであるお方は、悪魔の代理人たちの攻撃のために備えをして下さった。そしてこのお方はどの時代においても忠実な者にご自分

のみ言葉を果たして下さる。そのみ言葉は確かであり、揺らぐことがない。一点一画も裏切ることはない。もし人が神の保護の下に居続けるなら、彼らの上に翻るこのお方の旗印は、不落の要塞のようである。このお方は、ご自分のみ言葉が決して裏切ることがないという証拠をお与えになる。このお方は暗いところを照らす光を夜明けまで示される。義なる太陽であるお方は、その光線に癒しをたずさえて上ってこられる。……

このお方はあなたと共にとこしえに宿るために、あなたの嘆願者となり、あなたの導きとなるために聖霊が与えられたことを保証される。このお方はご自分に信頼し、自らをご自分の守りに委ねるようにとお求めになる。聖霊は絶えず教え、思い起こさせ、証し、魂に神聖な慰め主として臨み、定められた裁き主また導きとして罪を自覚させるために働いておられる。……

あなたの働きは、あなたがキリストのうちにあって完全となることができるように、キリストと共に協力することである。信仰によってこのお方と結合し、このお方を信じ、受け入れることにより、あなたはこのお方の一部となる。あなたの品性は、あなたのうちに表されるこのお方の栄光である。(原稿 44, 1897 年)

4月26日

聖霊の力を吹き込まれる

「『ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう。』」
(使徒行伝 1:8)

御霊のあらわれのうちにみ言葉を宣布することは、わたしたちの特権である。主イエス・キリストを信じる信仰を働かせることはすべての魂の特権である。しかし、純粋な霊的生活はただ和解させる救い主キリストを通して、自らを神のみ旨に明け渡すときにのみもたらされる。聖霊によって働いていただくことはわたしたちの特権である。信仰を働かせることによって、わたしたちはキリスト・イエスとの交わりに入る。なぜなら、キリストは柔和で心のへりくだったすべての人の心に住まわれるからである。彼らの信仰は愛によって働き、魂をきよめる信仰であり、心に平安をもたらし、自己否定と自己犠牲の道に導く信仰である。

約束は、もしわたしたちが主を知ることを切に求めるならば、「主はあしたの光のように必ず現れいで」ことを知るといふものである。わたしたちが日々、心のうちに改心させる神の恵みをもつことは重要不可欠である。こうしてわたしたちのすべての言葉と行為は、わたしたちが神の思いとご意志に服しているという証拠を示す。柔和とへりくだりをもって自分に定められた奉仕をなすとき、わたしたちは自分の生活に聖霊の改心させる力を表すのである。そのとき、わたしたちはこのお方の働きをなす主の代理人となる。

へりくだりと柔和をもちながら、なお大いなる熱心さをもって、わたしたちは自分の奉仕を神にお捧げすべきである。キリストがわたしたちの型であり、万事におけるわたしたちの模範であられる。このお方は御霊に満ちておられた。そして、御霊の力がこのお方を通して、体の動きによってではなく、よい働き

への熱心さによって表されたのであった。

神の民の間で、深く徹底的な心の吟味が必要である。それによって何が真の宗教を構成しているかを理解できるためである。キリストはすばらしい教育者であられる。このお方の生活と言葉は健全な原則に基づいている。このお方の教え方は非常に単純であった。このお方は神のみかたちにかたどられた。そしてわたしたちがこのお方に従うならば、間違いを犯すことはないのである。

……

わたしたちの生活は、キリストと共に神のうちに隠されなければならない。わたしたちはキリストの個人的な知識を持たなければならない。そのときはじめて、正しくこのお方を世の前に表すことができる。わたしたちがどこにいても、自分たちの光が神の栄光となるように良いわざのうちに輝き出るようにしなければならない。これがわたしたちの生涯の大きく重要な働きである。本当に聖霊の感化力の下にいる人々は、永遠の真理の原則を実際的に適用することによって、その力を表す。彼らは二本のオリブの枝から聖油が魂の部屋に注がれていることを表す。彼らの言葉は心を和らげ、制するために聖霊の力が吹きこまれている。語られた言葉が霊であり命であることが明らかにされるのである。(手紙 352, 1908 年)

4月27日

わたしたちが聖霊を用いることはできない 御霊がわたしたちを用いて下さるのである

「それがきたら、罪と義とさばきについて、世の人の目を開くであろう。」(ヨハネ 16:8)

キリストはご自分の教会に聖霊の賜物を約束された。そしてその約束は初期の弟子たちとまったく同様にわたしたちのものである。しかし、他のすべての約束と同様に、それは条件付きで与えられている。主の約束を信じると公言し、自分のものだと言張する人々が多くいる。彼らはキリストと聖霊について語る。しかし、彼らは恩恵を受けない。なぜなら、彼らは自分の魂を神聖な代理人たちの導きと支配に明け渡さないからである。

わたしたちが聖霊を用いることはできない。御霊がわたしたちを用いて下さるのである。御霊を通して、神はご自分の民のうちに「その願いを起させ、かつ」神のよしとされることを「実現に至らせる」(ピリピ 2:13)。しかし多くの人は導いていただくために屈服しない。彼らは自分自身を支配したいのである。これが、彼らが天の賜物を受けない理由である。へりくだって神を待ち望み、このお方の導きと恵みを待ち望んでいる人々にのみ、御霊が与えられる。この約束された祝福は、信仰によって要求されると、他の祝福をみな次々ともらす。それはキリストの恵みの富にしたがって与えられる。そしてこのお方は受ける容量にしたがって一人びとりの魂を満たす用意ができておられる。

御霊を与えることは、キリストの命を与えることである。このように神から教えられる人々だけが、御霊のうちなる働きをもち、その命のうちにキリストの命が表されている人々だけが、救い主の真の代表者として立つことができる。

神はもし人々が自らをご自分に明け渡すならば、人をありのままお受け入れになり、彼らをご自分の奉仕のために教育なさる。神の御霊は魂に受け入れら

れると、そのすべての機能を目覚めさせる。聖霊の導きの下に、あますことなく神に捧げられた思いは調和して発達し、神のご要求を理解し、果たすために強められる。弱くゆれ動く品性は、強く堅固な品性に変えられる。

継続的な献身はイエスとその弟子たちの間に非常に緊密な関係を確立するので、クリスチャンは品性において自分の主人に似たものとなる。彼はより明白で広い見解をもつ。彼の識別力はますます洞察にすぐれ、彼の判断はより均整の取れたものとなる。義の太陽の命を与える力によって活気づけられているので、彼は神の栄光のために実を豊かに結ぶことができるようになる。……

もし御霊が絶えず働き、再生させる代理人として個々の事情に世の贖い主がなされたことを効力のあるものとするために与えられなかったとしたら、神のひとり子が自らを低くし、不義なる者のために義なるお方が悪賢い敵の誘惑に耐え、そして死なれたことが、わたしたちに何をなし得たことであろう。(福音宣伝者 284～286)

4月28日

聖霊、キリストの特別な賜物

「しかし、キリストから賜わる賜物のはかりに従って、わたしたちひとりびとりに、恵みが与えられている。そこで、こう言われている、『彼は高いところ上った時、とりこを捕えて引き行き、人々に賜物を分け与えた。』」（エペソ 4:7, 8）

神の御子なるイエスは、わたしたちのために自らを低くし、わたしたちのために誘惑に耐え、わたしたちがどのように勝利できるかを示すためにわたしたちのために勝利された。……

聖霊は、勝利のために格闘している人々と共にいて、全能の力を表し、人間の代理人に超自然の力を授け、無知な者を神の王国の神秘について教えるとの約束がなされている。聖霊が偉大な助け主となって下さるというのは、すばらしい約束である。……

聖霊が与えられて、このお方の弟子たち、使徒たちは、あらゆる種類の偶像礼拝に対して固く立ち、主を、そして主だけを高く掲げることができるようになった。ご自分の御霊と聖なる力によるイエス・キリスト以外に、だれが聖なる歴史家たちの筆を導き、世がイエス・キリストの言葉と働き of 尊い記録を提示することができたであろうか。

このお方が御父の許へ昇天された後に遣わすと約束された聖霊は、絶えずカルバリーの十字架上の偉大な犠牲の務めに注意をひくために、また人への神の愛を世に表し、罪を自覚した魂に聖書の尊いことがらを開き、そして暗くなった思いに義の太陽の明るい光線、すなわち彼らの心のうちで目覚めたとしえの真理の知性によって燃えた真理を開くために働いておられる。

聖霊以外にだれが、思いの前に道徳的義の標準を提示し、罪を自覚させ、悔いのない悔い改めに至る信心深い悲しみを生じさせ、すべての罪から救うことのできる唯一のお方を信じる信仰を働かせるように鼓舞させることができる

であろうか。……

キリストの生涯を注意深く瞑想し、このお方がそもそも来られた理由を理解したいとの願いを絶えずもって研究すべきである。わたしたちはただキリストがわたしたちに命じられたように探ることによってのみ、結論を出すことができる。なぜなら、このお方は、「この聖書は、わたしについてあかしをするものである」と言われるからである。わたしたちはみ言葉を探ることによって、不従順の罪深さと対比して従順の徳を見出すことができる。「ひとりの人の不従順によって、多くの人が罪人とされたと同じように、ひとりの従順によって、多くの人が義人とされるのである」。

エデンの園を、その不従順という不正の汚点と共に、ゲッセマネの園と対比して、すなわち全世界の罪が世の贖い主の上におかれたときにこのお方が超人的な苦悩に苦しまれた場所と対比して注意深く研究すべきである。(原稿 1、1892 年)

4月29日

御霊を受ける影響

「ところが、わたしたちが受けたのは、この世の霊ではなく、神からの霊である。それによって、神から賜わった恵みを悟るためである。」(コリント第一 2:12)

聖霊は、弟子たちが主だけを高く掲げることができるように、そして聖なる歴史家たちの筆を導き、イエス・キリストの言葉と働きの尊い記録を世に伝えることができるようにした。今日、この御霊が絶えずカルバリーの十字架上の偉大な犠牲に注意をひくために、また人への神の愛を世に表し、罪を自覚した魂に聖書の約束を開くために働いておられる。

暗くなった思いに義の太陽の明るい光線が差し込むようにするのは御霊である。それは、とこしえの真理の悟りが目覚めることによって心のうちを燃やすのである。また思いの前に偉大な義の標準を提示し、罪から救うことのできる唯一のお方を信じる信仰を吹き込む。また人の愛情を一時的で滅びゆくものから引き離し、それらを永遠の嗣業に留める。御霊は人間を再創造し、精錬し、聖化し、彼らを王家の一員、天の王の子にふさわしい者とする。

人が完全に自分を空にすると、すべての偽りの神が魂から追放されるとき、空いた所はキリストの御霊が流れ込むことによって満たされる。そのような人は魂を汚れから清める信仰をもっている。彼は御霊に順応し、御霊の事柄に思いをかける。彼は自分を信用しない。キリストがすべてにおけるすべてであられる。彼は柔和をもって絶えず表される真理を受け入れ、主にすべての栄光を帰して言う、「それを神は、御霊によってわたしたちに啓示して下さった」。……

明らかにする御霊はまた、彼のうちに義の実を生じさせる。彼のうちにおられるキリストは「泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがる」。彼はまことのぶどうの木の枝であり、神の栄光のために豊かな実の房をみのらせる。この実

の持つ性質はどのようなものであろうか。御霊の実は、憎しみではなく「愛」であり、不満と嘆きではなく「喜び」であり、いらだちや不安や作りだした試練ではなく「平和」である。それは「寛容、慈愛、善意、忠実(信仰)、柔和、自制」である(ガラテヤ 5:22, 23)。この御霊をもっている人々は、神と共に働く熱心な働き人である。……彼らは良識ある言葉を語り、心の宝庫から、キリストの模範にならって純潔で神聖なことを語る。(福音宣伝者 286～288)

4月30日

わたしたちはキリストの愛と喜びを 表すべきである

「どうか、望みの神が、信仰から来るあらゆる喜びと平安とを、あなたがたに満たし、聖霊の力によって、あなたがたを、望みにあふれさせて下さるように。」

(ローマ 15:13)

聖霊という大きな無限のたまものの中には、天のすべての資源が含まれている。神の恵みの富が、地上の人びとに流れないのは、神の側に何か制限があるためではない。喜んで受けさえするならば、だれでも聖霊に満たされるのである。神の恵みの富、はかり知ることのできないキリストの富を世界に伝えるための神の生きた通路になるという特権は、だれにでも与えられている。キリストは、他の何ものにもまして、キリストのみ霊と品性とを世界に代表する器があらわれるのを望んでおられる。人間によって救い主の愛があらわされることほど、世界が求めているものはない。人の心に喜びと祝福を与える聖油を注ぐことができる管を、全天は待っているのである。

教会が世の光であるイエスの光を受け、インマヌエルの栄光に輝き、全く変えられた体となることができるように、キリストはあらゆる準備をなされた。彼は、すべてのクリスチャンが光と平和の霊的ふんい気に包まれることを望んでおられる。そして、わたしたちがキリストご自身の喜びを、わたしたちの生活のなかにあらわすことを願っておられるのである。

み霊の内住は、天の愛があふれ出ることによってわかる。神の満ちみちた徳は、献身した代表者を通して流れ出て、人びとに与えられるのである。

義の太陽は「その翼には、いやす力を」備えている(マラキ書 4:2)。そのように、真の弟子からは、だれからでも、生命と勇気と援助と真のいやしを与える感化が発散するのである。

キリスト教は、ただ罪の許しを与えるだけではない。それは、まずわたしたちの罪を取り去って、そのあいたところを、聖霊の徳で満たすのである。これは、神の光を受けて、神にあって喜ぶことである。自己を全くむなしくして、絶えず、キリストの臨在の祝福を受けることである。キリストが魂を支配なさるときに、そこには、純潔と、罪からの自由がある。福音の計画の栄光と、その満ちみちた完全さが生活の中に完成されるのである。救い主を受け入れることによって、完全な平和、完全な愛、完全な確証の喜びを味わうことができる。神が確かにみ子を世の救い主として、世界に送られた証拠として、わたしたちの生活のなかに、キリストの品性の美とかぐわしさがあらわれるのである。(キリストの実物教訓 394～396)

信じることに平安があり、聖霊に喜びがある。信じることは平安をもたらし、神に信頼することは喜びをもたらす。(教会への証 2 卷 319, 320)

研究 10

三重のメッセージ



第二天使のメッセージ

Part 2

「バベルの塔とその建設者たち」

バビロンという言葉は何を意味し、その起源は何でしょうか。わたしたちは創世記 10:10 および 11:9 から学ぶことができます。ニムロデはバベルの王国を設立しました（のちになってこれはバビロンと呼ばれ、地上における最初の政府となりました）。まもなく人々は自分たちの名前を上げ、散らされることを防ごうとバベルの塔を建設し始めました。これは、ちょうどノアを通して主が彼らにお教えになったこととは正反対でした。「バベルの人々は、神から独立した政府を設立しようと考えていた。そのなかには、神を恐れる人もいくらかあったが、不信の人々の主張に欺かれて、その企てに引き入れられていた。主は、こうした忠実な人々のために、刑罰をのぼし、人々の正体が明らかになるように時間をお与えになった」（人類のあけぼの上巻 118）。

「神はいつもご自分に仕える残りの民をとっておかれた。アダム、セツ、エノク、メトセラ、ノア、セムなどが次々に立ち上がり、神のみこころの尊い啓示を代々保ったのであった。テラの子が、この神聖な信任にあずかる者になったのである。偶像礼拝は、あらゆる面から彼を誘惑したが、彼は負けなかった。アブラハムは、信仰のない人々のなかで、信仰あつく、神にそむいた人々のなかで汚されず、ただひとり、真の神の礼拝を堅く守り続けた」（人類のあけぼの上巻 121）。わたしたちがノアから十代目の子孫にまで下る短い記録をたどると、アブラハムという名を見出します。アブラハムについてはすばらしい証があります。人の建造し

た都市や塔の代わりにアブラハムは「彼は、ゆるがぬ土台の上に建てられた都を、待ち望んでいたのである。その都をもくろみ、また建てたのは、神である」（ヘブル 11:10）。ですから、「世のはじめから忠実な人々がこの地上に教会を構成してきた。いつの時代にも主は見張りびとをお持ちになっていた。彼らは、彼らが生きた世代に忠実なあかしを立ててきたのである」（患難から栄光へ上巻 3）。

今日、バビロンとは全世界的な世俗的教会を意味しており、それは女と呼ばれています。象徴として女は、教会を意味します。黙示録 12 章の女が教会を意味していると理解されているのと同じように、17 章の女もまた、疑いの余地なく、教会を意味していると理解すべきです。女の性質は象徴されている教会の性質を確定しており、きよい女は純潔な教会を表し、みだらな女は不純で背信した教会を表しています。女バビロンは、彼女自身淫婦であり、また彼女自身のような娘たちの母です。この状況は、名前自体が示している通り、バビロンは一つだけの教会組織に限定されているのではなく、多くの教会から成り立っているはずであることを示しています。それはみな一様に性質において似ており、そして完全に墮落したもしくは背教した地上の教会を表しています。

真の教会はきよいおとめです（コリント第二 11:2）。世と友になり結合する教会は淫婦です。彼女をヨハネの黙示録の大淫婦としているのは、この地上の諸王たちとの不法なつながりです（黙示録 17 章）。こうして、ユダヤ教会は、はじめは主（エレミヤ 2, 3 章； 31:32）の妻となっていましたか、淫婦となりました（エゼキエル 16 章）。この教会はこのように神から背信したとき、ソドムと呼ばれましたが（イザヤ 1 章）、それはちょうど黙示録 11 章で「大いなる都」（バビロン）がそう呼ばれていると同様です。バビロンが罪ありとされているのは世とのこの不法な結合であり、このことはバビロンが社会的権力ではないことをはっきりと証明しています。バビロンが投げ捨てられる直前に、神の民が彼女のうちにいるということは、彼女が宗教組織だと公言している証拠です。

「バビロン」という言葉は、「バベル」からきたもので、混乱を意味している。この言葉は、聖書では、種々の形をとった偽りの、あるいは背教的な宗教を指すのに用いられている。黙示録 17 章には、バビロンは女であるといわれている。

女は、聖書では教会の象徴として用いられている。純潔な女は、純潔な教会であり、汚れた女は、背教した教会を表わしている」（各時代の争闘下巻 82）。

バビロンがこのように道徳的に墮落した理由として挙げられているのは、「不品行に対する激しい怒り〔激しい情欲〕のぶどう酒を、あらゆる国民に飲ませた」からです。これが言及しているのはただ一つしかありません。それは偽りの教理です。「バビロンとは、その誤りと罪のために、また、天からの真理を拒んだために倒れた教会である」（各時代の争闘下巻 376）

彼女は神のみ言葉の純粋な真理を腐敗させ、あらゆる国民を、人を喜ばせる寓話で酔わせました。彼女の教える神のみ言葉に反した教理は次のように挙げられます。

1. 地上の千年期、すなわちキリストの再臨前に全地に臨む平安と繁栄と義の千年間という教理

2. 水に沈める代わりにふりかけること。水に沈める方法だけが聖書的なバプテスマであり、わたしたちの主の埋葬と復活を記念するのにふさわしく、この目的のために制定されたのです。

3. 律法の変更、特に第四条の安息日である第七日目を、主の安息の日また復活の記念日として日曜日の祭日に変更しましたが、これはかつて一度も命じられたことのない記念日であり、決してその出来事を記念する日とはなり得ません。

4. 魂は生来不死であるという教理。そこから他の邪悪な教理が生じています。たとえば死人には意識があるという教理、聖徒崇拜、マリア崇拜、煉獄、死んだときに報いを受けるという教理、死人のための祈りやバプテスマ、永遠の責め苦、そして万人救済説などです。

5. 聖徒たちは覆われていない実体のない霊として、自分たちの永遠の嗣業をかなたの「時間と空間の境界を越えた」漠然とした地域に見出すという教理。こ

うして多大の人々が、この現在の地球は、裁きの日また不信心な人々が滅ぼされる日に、火によって滅ぼされるということ、またその灰から全能者の声が新地を呼び出し、それが将来の永遠の栄光の王国となり、また聖徒たちがそれを自分たちの永遠の嗣業として所有するのだという聖書的な見解に背を向けてきました。

6. キリストの再臨は霊的なことであり、文字通りの出来事ではなく、エルサレムが破壊されたときに成就した、あるいは改心において、もしくは死や、心霊術などにおいて成就するという教理。どれほど多くの人々がこのような教えによって、キリストの再臨は将来おこる確固とした出来事であり、文字通り、このお方ご自身が、見えるかたちで来られ、結果としてこのお方のすべての敵には滅びとなり、すべてのご自分の民には永遠の命となるという聖書的な見解に思いを閉ざしてきたことでしょうか。

7. 信心の標準をまさにちりの中にひきずりおろしたこと。人間は信心の形式だけでまったく十分であり、「主よ、主よ」という言葉を空しい決まり文句として繰り返すことによって、天の王国への確かな旅券となると信じ込まされています。

「いわゆるキリスト教会の世界でも、多くの人々は聖書の明らかな教えから離れて、人間の推論や耳ざわりのよい作り話をもとにして教義をつくりあげている。そして、彼らは自分たちの塔が、天への道であると指さしている。罪人は死なない、神の律法には従わなくても救いは得られると教える雄弁家の言葉に、人々は賛嘆して耳を傾けている。もしキリストに従うと称する人々が神の標準を信じるならば、それは、彼らを一致させることであろう。しかし、人間の知恵が神の清い言葉以上に高められているかぎり、分裂と不和は起こる。今日の互いに相入れない信条や教派による混乱は、「バビロン」という言葉で実によく表わされている。この預言は、終末時代の世俗的諸教会にあてはまる(黙示録 18:2 参照)」(人類のあけぼの上巻 119)。

洪水後の背教

「そして、彼らは神を認めることを正しいとしなかったので、神は彼らを正しからぬ思いにわたし、なすべからざる事をなすに任せられた。」(ローマ 1:28)

「忠実な義の説教者ノアは、洪水後 350 年生きながらえ、セムは 500 年生きながらえたから、その子孫は、神の要求が何で、神が、彼らの父祖たちをどう扱われたかを知る機会があった。しかし、彼らは、このような耳ざわりな真理を聞こうとはせず、神を知ろうと望まなかった。」(人類のあけぼの上巻 117)

「地が人口で満ちるとまもなく、人間は神と天に対する自分たちの敵意を再燃させた。彼らはあたかも人間を惑わせ、彼らに不自然な戦争を続けさせる芸術や発明が、聖なる遺産でもあるかのように、自分たちの敵意を自分たちの子孫に伝えたのであった。」(バブル・コム列 [E.G. 初付コムト] 1 巻 1091)

「全地は同じ発音、同じ言葉であった。時に人々は東に移り、シナルの地に平野を得て、そこに住んだ。彼らは互に言った、「さあ、れんがを造って、よく焼こう」。こうして彼らは石の代りに、れんがを得、しっくい代りに、アスファルトを得た。彼らはまた言った、「さあ、町と塔とを建てて、その頂を天に届かせよう。そしてわれわれは名を上げて、全地のおもてに散るのを免れよう。」(創世記 11:1 ~ 4)

「ノアの子孫は、しばらくの間、箱舟が止まった山地に住んでいた。彼らの数が増加するにつれて、間もなく背信と分裂が生じた。創造主を忘れて、神の律法の制限から脱出しようと望んだ者らは、神を恐れる仲間の教えや模範を絶えずきらっていた。やがて、彼らは、神の礼拝者から分離することに決めた。そこで彼らは、ユフラテ河畔のシナルの平原に下った。」(人類のあけぼの上巻 114)

反逆の同盟

「なぜなら、彼らは神を知っていながら、神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなったからである。彼らは自ら知者と称しながら、愚かになり」(ローマ 1:21, 22)。

「バベルの建設者は、神に不満の精神を抱いた。彼らは、神のアダムに対するあわれみやノアと結ばれた恵み深い契約を感謝して記憶しようとはせず、かえって、アダムとエバをエデンから追放し、洪水によって世界を滅ぼした神の苛酷さに不平をならした。しかし、彼らは、神に向かって、専制的で苛酷であるつつぶやく一方、最も残酷な暴君の支配を受け入れていた。サタンは、キリストの死を予表した犠牲のささげものを軽視させようと努めていた。そして、人々の心が偶像礼拝によって、暗くなると、これらのささげもののにせ物をささげさせ、彼らの神々の祭壇に、自分の子供たちをささげさせた。人々が神から離れると、正義、

純潔、愛などの神の性質は压制、暴虐、残忍などにかわっていった。」(人類のあけぼの上巻 117)

「言われた、『民は一つで、みな同じ言葉である。彼らはすでにこの事をしはじめた。彼らがしようとする事は、もはや何事もとどめ得ないであろう。さあ、われわれは下って行って、そこで彼らの言葉を乱し、互に言葉が通じないようにしよう。』」(創世記 11:6, 7)

「この同盟は神に対する反逆から生まれたものであった。シナルの平原に住んでいた人々は神の栄光のためではなく、自己称揚のための自分たちの王国を建てた。彼らがもし成功していたならば、強大な権力が勢力を握るようになり、義を追放し、新しい宗教を始めたことであろう。世は混乱させられたことであろう。誤った理論と宗教的な概念が交じりあうとき、それは平安と幸福と安全に対して戸を閉ざす結果になったことであろう。これらの推測や誤った理論が実行され、完成されたならば、思いを神のおきてへの忠誠からそらし、そしてエホバの律法は無視され、忘れられたことであろう。かたくなで、第一の大いなる反逆者の精神を吹き込まれ、彼に突き動かされている人々は、自分たちの計画や自分たちの邪悪な方針がいかなる妨害にあうことも抵抗したであろう。神の規則の代わりに、彼らは自分たちの目的を実行することができるために自分たちの利己的な心の野心に従って作られた法律をすえたことであろう。」(バブル・メンタリ [E.G. 叔父コメント] 1巻 1092)

古代と近代のバベル

「こうして主が彼らをそこから全地のおもてに散らされたので、彼らは町を建てるのをやめた。これによってその町の名はバベルと呼ばれた。主がそこで全地の言葉を乱されたからである。主はそこから彼らを全地のおもてに散らされた。」(創世記 11:8, 9)

「バベルの建設者の企ては、恥と失敗に終わった。彼らの誇りの記念碑は、その愚かさの記念碑となった。それでも人々は、同じ道をたどり続けて、自己に頼り、神の律法を拒否している。これは、サタンが天で実行しようとした原則であった。カインがささげものをささげたときの精神もこれと同じであった。」(人類のあけぼの上巻 118, 119)

「『バビロン』という言葉は、『バベル』からきたもので、混乱を意味している。」

(各時代の争闘下巻 82)

「彼らは神を知っていると、口では言うが、行いではそれを否定している。彼らは忌まわしい者、また不従順な者であって、いっさいの良いわざに関しては、失格者である。」(テトス 1:16)

「現代にも塔の建設者がいる。無神論者はいわゆる科学的推論によって、彼らの学説を打ちたて、啓示された神の言葉を拒否する。彼らは、神の道徳的統治に批判を加え、神の律法を軽視し、人間の理性の十分なことを誇る。そして『悪しきわざに対する判決がすみやかに行われないうちに、人の子らの心はもっぱら悪を行うことに傾いている』(伝道の書 8:11)。

いわゆるキリスト教会の世界でも、多くの人々は聖書の明らかな教えから離れて、人間の推論や耳ざわりのよい作り話をもとにして教義をつくりあげている。そして、彼らは自分たちの塔が、天への道であると指さしている。罪人は死なない、神の律法には従わなくても救いは得られると教える雄弁家の言葉に、人々は賛嘆して耳を傾けている。もしキリストに従うと称する人々が神の標準を信じるならば、それは、彼らを一致させることであろう。しかし、人間の知恵が神の清い言葉以上に高められているかぎり、分裂と不和は起こる。今日の互いに相入れない信条や教派による混乱は、『バビロン』という言葉で実によく表わされている。この預言は、終末時代の世俗的諸教会にあてはまる(黙示録 18:2 参照)。(人類のあけぼの上巻 119)

「黙示録 17 章には、バビロンは女であるといわれている。女は、聖書では教会の象徴として用いられている。純潔な女は、純潔な教会であり、汚れた女は、背教した教会を表わしている。」(各時代の争闘下巻 82)

今日の背教

「また、あなたが自身の中からも、いろいろ曲ったことを言って、弟子たちを自分の方に、ひっぱり込もうとする者らが起るであろう。」(使徒行伝 20:30)

「悪人と詐欺師とは人を惑わし人に惑わされて、悪から悪へと落ちていく。」(テモテ第二 3:13)

「背教を通して、墮落した人間と墮落した天使たちとは同盟を結び、善に敵対して共に働いている。彼らは決死の徒党を組んで結合している。サタンは自分の悪天使たちを通して、うわべは経験深い人間と連合を結び、こうして神の教会

をパン種のように徐々に変化させようともくろんでいる。彼はもし自分が天使たちをそそのかしたように、人間をそそのかし、神の僕という仮面のもとに反逆に加わらせることができれば、天に対する自分の企てにおいて、彼らがもっとも効果的な同盟者となることを彼は知っている。」(バブル・コメンタリ [E.G. 初付コメント] 4 卷 1142)

「また、ある者たちがつぶやいたように、つぶやいてはならない。つぶやいた者は、「死の使」に滅ぼされた。これらの事が彼らに起ったのは、他に対する警告としてであって、それが書かれたのは、世の終りに臨んでいるわたしたちに対する訓戒のためである。だから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけるがよい。」(コリント第一 10:10～12)

「わたしは、何か自分たちにあわないこと、また自分たちが考えるほどに自分たちに思いやりを示さないことを言われたり、されたりしたからといって、つぶやきと不平の働きにたずさわっているすべての人々に強く熱望する。自分たちがまさに天でサタンが始めた働きを実行しているのだということを思い出して欲しい。彼らはサタンの轍(てつ)を踏み、不信と不和と不忠実をまいている。なぜなら、だれ一人として不満の気持ちを抱きながら、それを自分に秘めておくことはできないからである。彼は必ず自分がしかるべき取り扱いを受けていないと他人にもらす。こうして彼ららはつぶやきと不平へと導かれる。これがはえ出る苦い根であり、これによって多くの人が汚される。

こうしてサタンは今日、自分の悪天使たちを通して働いている。彼は信仰のうちにあると主張している人々と同盟を結んでいる。そして、人間にあがめられることなく、偽善と二心なく働いて、忠実に神の働きを前進させようとしている人々は、神を愛すると主張している人々を通して、サタンが彼らにもたやすことができるのと同じほど激しい試練にあうことになる。これらの反対者たちが持っている光と知識に比例して、サタンは成功するのである。」(バブル・コメンタリ [E.G. 初付コメント] 4 卷 1142)

偽物と本物

「主は天から見おろされ、すべての人の子らを見、そのおられる所から地に住むすべての人をながめられる。」(詩篇 33:13, 14)

「神の審判の時が近づいている。いと高き神は、人の子らが何を建てている

のかを見るために来られる。彼の統治権は、明らかにされ、人間の高ぶりのわざは打ちくだかれる。」(人類のあけぼの上巻 120)

「同盟というのは何を指して言っているのですか、と質問がなされた。だれがその同盟を結成しているのですか、と。あなたは同盟が何かを知っている。それは、純潔でまっすぐな、ゆるぎない高潔さという印を帯びていない働きにおける人間の連合である。悪人たちは企業合同(トラスト)のうちに、連合のうちに、同盟のうちに一団となって結束しつつある。これらの組織とは何のかかわりも持たないようにしよう。神がわたしたちの支配者であり、わたしたちの統治者であられる。そしてこのお方はわたしたちに世から出て分離せよとお召しになる。「彼らの間から出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。そして、汚れたものに触れてはならない」。もしこうすることを拒むならば、もし世と結合し続けるならば、そしてすべてのことを世的な見地から見るならば、わたしたちは世と同じようになる。世的な方針と世的な考えがわたしたちの取引きを支配するならば、わたしたちは永遠の真理という高尚で聖なる土台の上に立つことはできない。」(パウル・コムリ [E.G. 初作コメ] 14 巻 1142)

「わたしたちは結合しなければならないが、それは誤った土台に基づいてではない。」(原稿 15 巻 259)

「わたしたちの天に到達する唯一の希望は、キリストと一つになることである。そしてそのとき、キリストのうちに、またキリストを通して、わたしたちは互いに一つになるのである。」(上を仰いで 141)

「わたしたちは今、真理のために堅く立つべき時にいる。わたしたちは魂への愛を心に抱くべきであるが、決して、決して、命に関わる真理のもっとも小さな点も明け渡してはならない。なぜなら、真理、すなわち純潔で混じりけのない真理を保つことによって、わたしたちはこの時代にわたしたちの君イエス・キリストに誉れを栄光を帰することができるからである。」(神のむすこ娘たち 196)

(82 ページの続き)

に立つと、かれらの生まれもった能力以上の力にうごかされていることはあきらかでした。声(こえ)も態度(たいど)もかわって、厳肅(げんしゆく)な力をもってさばきの警告(けいこく)をなし、「神をおそれ、神に栄光(えいこう)を帰せよ。神のさばきの時がきたからである」という聖句(せいく)をもちいました。かれらは、人々の罪を譴責(けんせき)し、不道德(ふどうとく)と悪徳(あくとく)を非難せめるだけでなく、世俗(せぞく)と背教(はいきょう)をせめ、すみやかに下ろうとしている怒(いか)りからのがれるようにと聞いている人々に警告しました。

人々は、これを聞いてふるえました。力ある神のみたまが、かれらの心に語りかけました。多くのひとは、あらたに深い関心をもって、聖書(せいしょ)をしらべるようになり、不節制(ふせっせい)で不道德(ふどうとく)なひとは生活をあらため、正しくない行いをあらためるひともありました。このようにいちじるしい結果(けっか)を見て、国教会の牧師(ぼくし)でさえ、この運動に神様の手を見とめないわけにはいきませんでした。

すくい主が来られるとの知らせがスカンジナビアの国々に伝えられることは、神様のみ心でした。そして、神様のしもべたちの声が沈黙させられたときに、神様は、働きをなしとげるために、子どもたちに聖霊(せいれい)をそそがれました。イエス様がよろこびにみちた人々をつれて、エルサレムに近づかれたとき、かれらは勝利(しょうり)のさげびをあげ、しゅろの枝をふって、イエス様をダビデの子と宣言(せんげん)しました。それを聞いたしつと深いパリサイ人たちは、かれらをだまらせるようにイエス様にもとめました。

……パリサイ人が、ひどくきげんをそこねて、「あの子たちが何を言っているのか、お聞きですか」とイエス様に言ったとき、イエス様は答えて、「そうだ、聞いている。あなたがたは『幼(おさ)な子、乳(ち)のみ子たちの口にさんびを備(そな)えられた』とあるのを読(よ)んだことがないのか」と言われました。神様は、キリストの初臨(しよりん)のときに子どもたちによってはたらかれたように、再臨のメッセージを伝えるときにもかれらによってはたらかれたのです。すくい主の再臨は、すべての民族、国語、国民にのべ伝えられるという神様の言葉は、そのとおりに実現(じつげん)するのです。

各時代の争闘下巻 63 ~ 65

にらと油揚げの餃子

〔材料〕 ぎょうざ 1 袋分 (20 枚入り大判うす型)

にら (みじん切り)	1 把
ねぎ (みじん切り)	1 本
しいたけ (みじん切り)	3 個
油揚げ (手あげ風を油ぬきしたものをみじん切り)	1 枚
キャベツ (みじん切り)	2 枚
木綿豆腐 (水切りしたもの)	1/2 丁
しょうが (おろしたもの)	1 片
しょう油	小さじ 2
塩	ほんの少々
粉末こんぶだし	小さじ 1/2
餃子の皮 (大判うす型) 20 枚入り	1 袋

〔作り方〕

1. 材料をすべて混ぜる。
2. ぎょうざの皮に包んでいく。
3. ごま油 (分量外) をしいて餃子を入れ、焼き目がついたら、少量の水 (分量外) を入れてふたをし、蒸し煮にします。
4. 水分がなくなり、皮が透明になったら、できあがり!

〔一口ポイント〕

水分が出てきて包みにくくなったら、小さな麩を手でつぶして汁を吸わせると、味も逃さず便利です。

教会プログラム (毎週土曜日)

安息日学校 : 9:30-10:45 (公開放送)

礼拝説教 : 11:00-12:00 (公開放送)



【公開放送】 <http://www.4angels.jp>

聖書通信講座

※無料聖書通信講座を用意しております。

□聖所真理



お申込先 : 〒 350-1391 埼玉県狭山郵便局私書箱 13 号「福音の宝」係
是非お申し込み下さい。

書籍

【永遠の真理】聖書と証の書のみに基づいた毎朝のよみもの。



【安息日聖書教科】は、他のコメントを一切加えず、完全に聖書と証の書のみに基づいた毎日の研究プログラムです。



スカンジナビアの 子供説教者たち

「みどりごと、ちのみごとの口によって、ほめたたえられています。あなたは敵(てき)と恨(うら)みを晴(は)らす者とを静(しず)めるため」(詩篇 8:2)

E・G・ホホワイト著

(大きな再臨運動(さいりんうんどう)のあいだ) 再臨(さいりん:イエスキリストがふたたび来られること)のメッセージは、スカンジナビアにおいても伝えられ、広く人々の関心(かんしん)をひきおこしました。多くの者は、かるがるしい安心感(あんしんかん)からさめて、罪(つみ)を告白(こくはく)して放棄(ほうき)し、キリストの名によるゆるしを求めました。しかし、国教会の聖職者たちはこの運動に反対(はんたい)し、そのために、メッセージを伝えたひとたちは牢獄(ろうごく)に入れられました。主の再臨を伝える人たちがこうして沈黙(ちんもく)させられた多くの場所で、神様は、子どもたちを用いて、奇跡的(きせきてき)な方法でメッセージをお送りになりました。かれらは未青年(みせいねん)でしたから、国の法律(ほうりつ)はかれらを禁(きん)じることができず、かれらはなんのさまたげもなく語(かた)ることを許されました。……

おさない説教者自身も、たいていはまずしい家の子でした。6才や8才の子どもたちもいました。かれらは、すくい主を愛(あい)することをその



生活であらわし、神様の聖(せい)なる要求(ようきゅう)にしたがって生活しようとしておりましたが、ふだんは同じ年の子どもたちのふつうの知性(ちせい)と能力(のうりょく)をあらわしているにすぎませんでした。しかし、かれらが人々の前